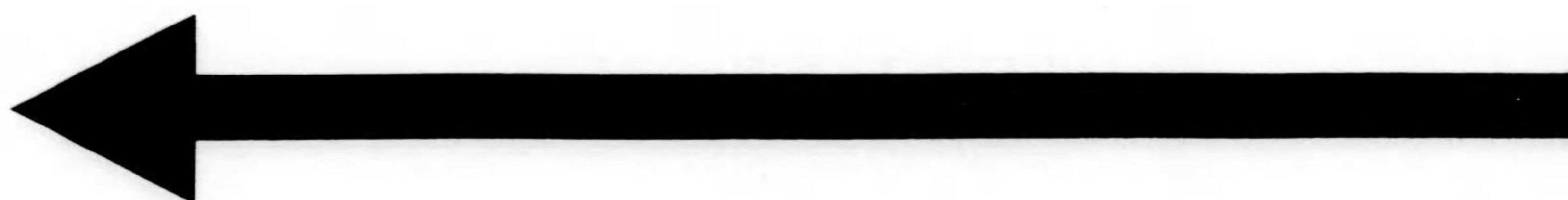


始



悲劇小説

紅

く
ん
さ
る

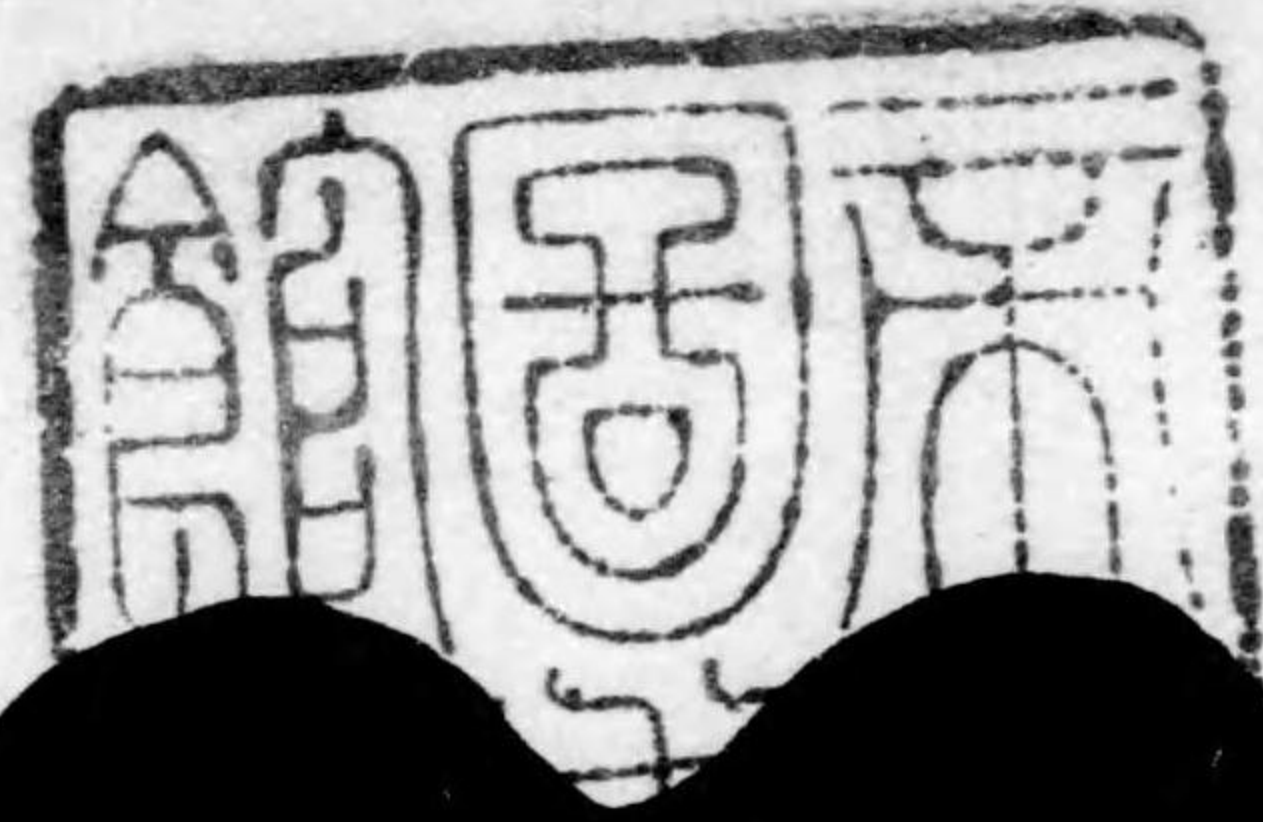
小林蹴月著

三國久畫





特102
990



小林躰月著
三國久畫

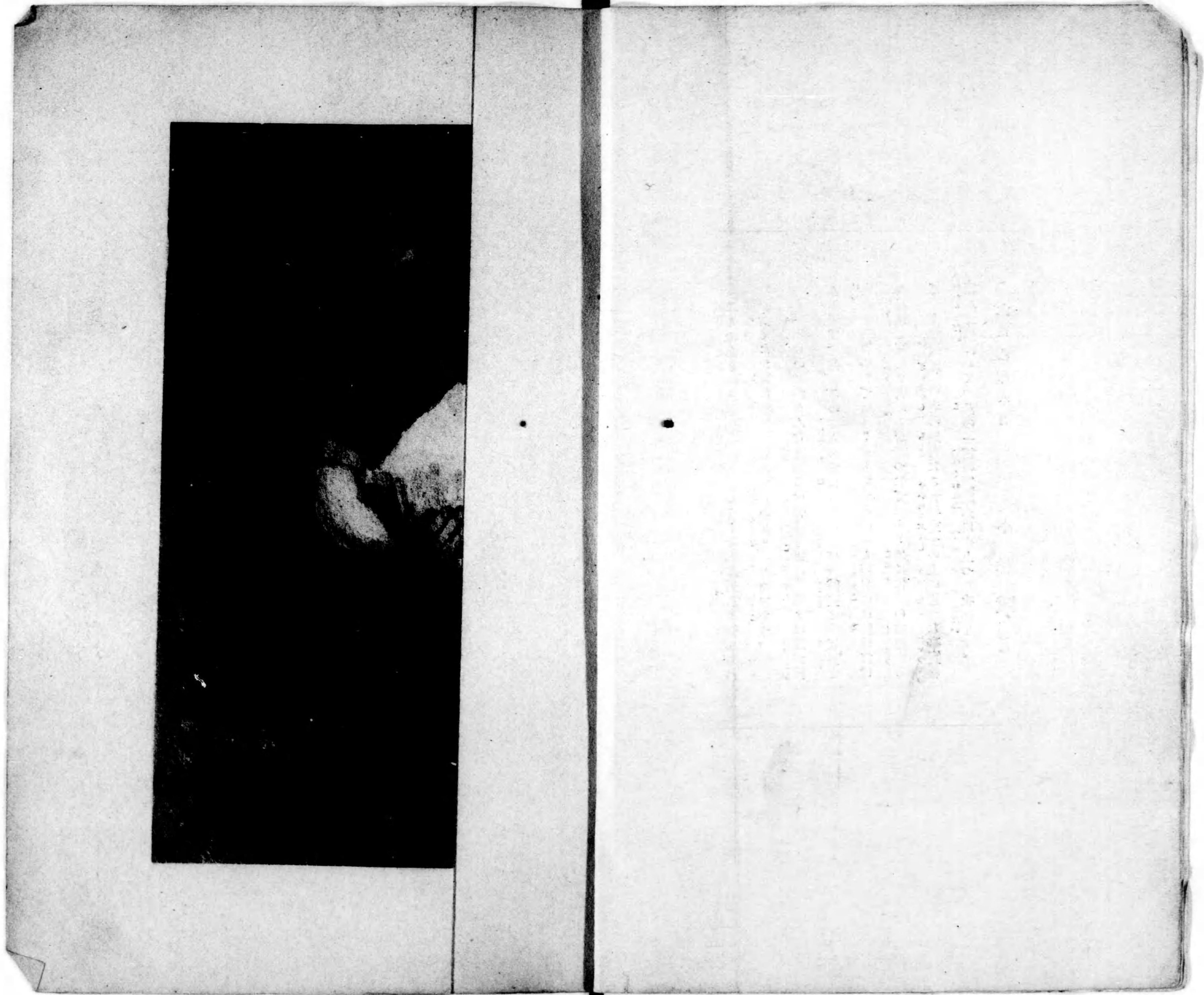


(序)

ふたりをんなひとりをこ
二人の女と一人の男……それは何れも捨てられ
たか捨てたか爲た揚句の果の二人の女と一人の男です。優し
いさか美しいさかそんな甘たるい初心な戀物語とは譯が違
ふのです。然もその二人の女には何れだけの誠實と意氣張と
決心があつたてせう？そして又その一人の男には何れだけ
の好意と實行と苦心とがあつたてせう？是は作者の空想から
でなく、現在作者の知人たる青年文士の上につつた事實物
語を土臺にして、此の一篇の『紅』が出来上つた次第です。

大正乙卯八月

小林 躑 月





またしても雪になりさうな空であつた。黝い陰気な鼠色の雲が見渡す限り大
 森の海を蔽つて、渚を洗ふ波の音までが黄昏の寂しさを絶えず冥府から現世へ
 吹き付けて居るかのやうであつた。剩へ、何處かの工場で吹き鳴らす汽笛の
 響きが殺される人の最期の叫びでもあるかのやうに、それはく消魂しい恐
 怖しさと驚愕と不安とを以て、玉枝の鼓膜を劈くばかりに強く烈しく聞えたの



小説
 紅

小林 蹴月 著

であつた。

玉枝の美しい描いたやうな眉根はびく／＼と動いた。彼女は自分の身で自分の身を抑へ付けるやうに袖と袖とを緊乎と重ねて、そして遣る瀬ない胸中の苦惱さを其處等に居る何者にでも知らせたくないやうに堅く抱き抱きたのであつた。少し伏目がちにした切の長い二つの睨には何とも云へぬ悔の悲みと恨みの炎とが濺つて居た。玉枝は思ひ切つて長い溜息を吐くべき元氣さへないのであつた。

塀外を通る近所の漁師か農家の女房であらう、姿は見えないが脊の兒を叱るやうな荒々しい聲が手に取る如く聞えた。

『家へ歸ればウムと乳呑まるせだにそねえに泣くもんでねえだよ。』

兒は辨別もなく泣きつゞくるのであつた。そして親は叱りながら、兒は泣きながら海邊の方へと急ぎ過ぐるのであつた。

玉枝は身ゆるぎも爲すに、小耳を傾げて、その兒の泣き聲に聞き惚れて居る景色であつたが、段々聲の幽れゆく頃になつて、初めてホツと我に返つたやうに眼を瞬たいた。その癖雨の睫毛には既う熱い露が玉をなして宿つて居るのであつた。

『彼の子も何處かには生きて居るんだらう？ 濟まぬ／＼事を爲て了つた……。』

玉枝は口の中で微かに吐きながら、窈と襦袢の袖で臉を押拭いたが、押拭いても押拭いても、泉のやうに熱い玉がぼろ／＼と滾れた。

『お歸り——。』

と、云ふ威勢の好い叫びが遙か表立關の方に響いたので、玉枝は悸乎と爲ながら、欄干の前を離れた。不圖見ると大森の海は何時か薄暗に暮れて、室内には電燈の火が来て居た。

玉枝は見るからにむつちりとした下膨れの飽まで色の白い顔に、稍厚化粧を

加へた赤い手塚の丸鬚姿であつた。殊にその引き締つた品のある口元と、黒味がちの明晰りとした眼元とは、此の新しき花嫁御寮の二大權威として見るべきものであつた。そして何處ともなしに華やかな初々しい姿態をさへ備へて居るのであつた。

玉枝は打て變つて晴れやかな笑顔を粧つて、そはくしさうに二階を降りかゝつた。

二

「お歸り遊ばせ。」

玉枝は憎いほど優しい鼻やかな、そして初々しい聲と姿態とで、良人の前にダイヤの光る手を支へた。如何見ても生娘から一躍して花嫁となつた女であつた。

良人は軽い一瞥をそれに酬いて、忙がしく洋服を脱ぎ初めた。

玉枝はやをら背後へ回つて、その脱ぎかけて居る洋服の袖を手傳つたりして居た。

上下お揃ひの大島紬の和服に着換へ了つた良人は、水の滴る様な縮緬の兵児帯をぎうと締めて、腰の横手に大きな結び玉を拵へながら、

「今日は誰も來んかつたかえ。」
と、訊ねた。

「はい、誰方もお見えになりませんやうで御座いました。」

「はてな？來にやならん奴が一人あつた筈だが……。」
と、良人は稍不審さうに小首を傾げた。

「何と被仰るお方で御座いませう。それでも私、お二階へ引込んどります間に
お見えになつたかも知れませぬ。一寸定やに聞いて見ませう。」

「なアに、來んけりや來んで、反つて僥倖なんだが……。」

と、良人は斯う言ひながら、ちん／＼と松風の音を立て、居る火鉢の上の鐵瓶を側へ下して、どつかりと自分の座蒲團に御輿を埋めた。それが怎麼にも一日の煩雜なる業務の羈絆から放免せられて、初めて平穩無爲の自分の天地へ生れ變つたやうな氣樂さが表はれて居た。

玉枝の二十二は齡に合はして稍若過ぎるやうであるが、良人の藤本善七郎は少くともそれに七八ツ位は年嵩のやうであつた。硬肉の小肥りに肥つた快活らしい若紳士である。眼は至つて細くて、上唇が少し反り返つて、其上齒並の亂杭式に近い所は、ともすると皮肉な冗談口でも利きさうな容子も窺はれた。色は淺黒いと云ふよりも寧ろ赤黒い方であつた。彼の現在の職務は、或る製絨會社の支配人格であつた。眞の支配人ではないが、その格に位して居るのであつた。

「なか／＼寒い、又雪かも知れんね。早く飯に爲て呉れんか。」

「はい、定やが只今……。」

と、玉枝は勝手の方を顧つて、定やに夕飯の仕度を急がさうと爲る時、善七郎の甥で、當時此の家から慶應の豫科へ通つて居る岩雄と呼ぶ書生が廊下の方から急ぎ足に出て來た。

「叔父さん、こんな人が訪ねて來ました。」

「善七郎は岩雄の手から一枚の名刺を受取つて見て、澁柿を舐めたやうに眉を擡めた。

「うむ、久永……宗吉。玉枝、此の人間だよ、留守に來んかつたかと聞いたのは……。」

「時間がわるう御座いますわね。何なら明日でも出直すやうにと被仰つたら……如何でせう。」

「でも和女、此の寒いのには本所から態々出向いて来たんだからね。仕方がない、面會してやらう。」

玉枝は咽喉の底で、久永と云ふ名前を幾度となく繰返して見たが、自分には何等記憶のない名前であるにも拘らず、それが何だか奇妙に氣に懸るやうな感じが爲てならぬのであつた。

三

善七郎は澁々ながら玄關に隣つた應接の室へ出て来た。と、是より先、來客の久永はちんとつゝましやかに椅子に凭つて、敷島の煙を紫に吹いて居る處であつた。セルの古袴に同じ古さの黒紬の紋付羽織を着た久永の蒼白い面貌は一見生の競争に疲れ切た敗北者どしか思へぬ。細く尖つた鼻と時々しよぼ／＼とせゝこましく瞬きさせる眼とは、別してその強度なる神經質の人たる事を示

した。彼は善七郎の姿を見かくると等しく、慌しさうに椅子を離れて、まだ半分以上残つて居る敷島の喫さしをぐいと火鉢の灰に差込んで了つた。

「何卒その儘、私が藤本です。」

と、善七郎は向ふ側の椅子に凭つて、

「委細は松山さんからのお手紙で承知しとりますが、餘程もう永い間遊んでお在のやうですね。」

「……職に離れましてから彼是一年程になりますやうな次第で……。」

「今日の世界で一年餘も遊んどツちや堪りませんね。他ならぬ松山さんの御紹介ですから、是非會社の庶務の方へでも何して差上げやうと思つて、實は概略の話が出来て居るのです。然し、御家族はお幾人ですかね？」

久永は家族の数を問はれて、一寸行詰つたやうに頭を垂げたが、

「實際は妻と私と夫婦ぎりなので御座いますが……他に一人二歳になつたばかり

りの男の兒が御座いますのです。」

「實際は御夫婦ざりだが……他に一人小兒と云ふのは、如何云ふ事なんですか？ 養子としてお貰ひにでもなつた譯ですかな。」

「いや、然う云ふ譯柄でも御座いませので……昨年の春で御座いますが、妻が初めて産と云ふものを致しました處、不幸にもその兒は至つて脆弱な性質のために、十日と経たんに死んで了ひましたのです。すると、折角有り餘る乳だからと申して、或る人の周旋に依りまして只今申上げました男の兒を預かりましたので御座います。是も原因はと申せば、生活難のためでは御座いまするが……。」

久永は面目なげに薄汚ない手巾を取出して額を拭くのであつた。

「成程、解りました。詰り里子としてお預りになつたのですね。」

「左様で御座います。然るに、それが何者の子とも分りませんので——勿論最

初の四五ヶ月はその周旋人の手を経て、月々の里扶持だけは送つて呉れましたが——たしか昨年の六月頃から以後、今日迄と云ふものは、一錢一厘の里扶持も送つて参りませんのみならず、その周旋を致しました男までが行方不明となつて了ひましたので、只今ではもう妻と二人でその子を抱へて途方に暮れ果て、居ります所で御座います。」

語り來つて、久永は押戴くやうに卓の上の澁茶を啜つた。

四

善七郎は喫みたくもない巻蓑を神代杉の蓑函から一本摘んで、それを指先に捻くりながら、久永のかまけ話に耳を敬つるのであつたが、漸く今久永の語が一段落を告げたのを合圖に、

「然うですか。世の中には随分怪しからん奴もあるもんですね。」

と、軽い憤慨の口氣を漏らした。

「……………然し、親の分らん兒だと思ひますと、反つて一層不憫が加はりますので、貧乏な中からも何うにか斯うにか今日までは養育して参りましたが、何時か一度は眞實の兩親に遇はしてやりたいものと存じて居ります。」

「そりや御道理の次第ですが、まあ、天が貴方方の寂寞を慰藉する爲に授けて呉れたものと諦めて居れば、それで可いじゃありませんか。」

久永は「それも然うです」と言ひたさうな面色で、例の臉をしよぼつかせた。

「で、只今のお話ですがね、直接會社へお入來下さる前に一寸社長の自宅へ顔を出してお置きになる必要がありますから、明日にでも然う爲すつたが可いですよ。」

「難有う御座います。早速歸宅致しまして妻に此の事を話しましたら嘸喜ぶ事

で御座いませう。愈會社の方へお世話を頂きます事になりますれば、私夫婦のみの幸福では御座いませぬ。親の分らん其兒までが、何れほどの幸福を得るか知れませぬ。」

と、久永は心から底から命の玉の緒に取付いた歡喜の色を湛えて、幾度となく感謝の語を繰返すのであつた。

「まだ然し、俸給や何かまで極つた譯ぢやありませんから、然うお禮ばかり言はれても困るです。兎に角堅忍と剛精とが第一ですから、そのお了簡でね。」

「いやもう食ふや食はずの苦痛を致します事を考へますると、何れ程の堅忍でも何れ程の剛精でも……………」

「所がです。大抵な者は人と仕事とに馴れて來るに従つて、段々放漫に流れやすいものでしてね。」

と、善七郎は一寸皮肉る。

「いえ、私に限りましては断じて……断じてお顔を潰すやうな事は致しませんから……」

と、久永は法廷で宣誓でも爲るやうに堅く／＼答へて、不圖氣付いたやうに咳き爲ながら、

「……………然し、日暮方にお伺ひ致して、存じ寄らぬ長座を致しまして御座います。何れ改めてお伺ひ致しまするが、今日はお暇を申し上げます。」

「關ひません、まあお話をなさい。」

とは言つたものの、善七郎も元より強て引止むる了簡はなかつた。で、玄關先まで久永を送り出した時には既う善七郎の頭腦の中には久永に關する問題なごは痕跡もなく消え失せて了つて、玉枝が奥で飯も食べずに待ちわびて居るだらうと云ふその氣遣はしさより外になかつた。

五

善七郎は一體高等商業の出身で、その學校に在つた時分には、學業の方よりも運動の選手として有名であつた程の快活なる人間であつたが、今から三ヶ月ほど前、玉枝を妻に娶つてから以來、不思議にもその舉動と云ひ語調までが著しく柔和に變つて、豹と小猫ほどの相違を來したのであつた。

一にも玉枝、二にも玉枝、玉枝以外には眞個女のない國のやうに善七郎は玉枝と夫婦になり得たる運命の幸を祝福歡喜して居た。然し、玉枝と善七郎との仲は、結婚以前に於て何等怪しむべき關係などあつた譯ではなかつた。正式の媒約人もあれば正式の見合もして、正式の上にも正式なる日比谷の太神宮で華燭の典を擧げたのであつた。勿論、此の結婚の成立つた第一の條件としては、玉枝その者が清淨無垢生れた儘の生娘であること云ふ媒約人夫婦の地球大の保證

と、其に適合する總ての神聖——總ての潔白を證據立てるべき玉枝が從來の家
庭上の品行とであつた。

要するに、善七郎は徹頭徹尾玉枝を清淨無垢毛筋ほどの瑕瑾もない玲瓏玉の
如き良家の生娘と信じたればこそ妻にも貰ひ、貰つてからも亦無上の満足と喜
悦とを以て、旦暮之に熱き赤心を捧げて居るのであつた。

仲の睦い若夫婦——他から見たらば蜂蜜の如く甘つたるい、若くは舌たるい
感じの爲ないでもないが、當人同志の樂しさと嬉しさとは、宛然飛行機に乗つ
て紫の霞棚引く春の武藏野を低くゆるやかに逍遙して居るやうな心地であらう
と思ふ。善七郎と玉枝との現在は正しくそれなのであつた。會社の同僚間でも、
善七郎の舊友間でも、既に其事は評判の一ツになつて居るほどで、而も善七郎
その者が餘り好男子でない丈に、一層多數人の羨みと嫉みと噂との的に爲られ
たのであつた。

「玉枝、好い心持に酔つたよ。飛んだ來客に妨げられて、空腹の上に空腹だつ
たもんだからね。」

「でも郎君、お酒がまだ此の通り残つとりますんですから……。」

「は、はア、強付けられちや仕方がない。もう一杯おまけをやるか。」

「あら、強付ける譯では御座いませぬけれども……。」

と、玉枝は白い手でお銚子を把つて酌し乍ら、片方の手に一寸齧の塵を拂ふ眞
似した。

「久永ッて被仰る方は、一體何の御用で入ッしたんで御座います。」

「なあに、相變らずの生活難で、口入を頼みに……。」

と、言ひかけて善七郎は急に細い目を睜き、

「いや、その久永の境遇なんだが、面白い事があるんだよ。彼れの女房が産後
の乳が有り餘るのと、浪人生活の苦しまぎれに、或る者の周旋で一人の里子

を預かつたさうな……二歳になる男の兒だと云ふがね。すると、その周旋人の奴も實際の生の親々も何處へか逃亡して了つたので、折角當にした里扶持はおろか、到頭その身元不明の小兒を彼の男夫婦で脊負込んで了はねばならぬ運命に陥つたと云ふ話だがね。はッ、は、は、一寸聞くと滑稽なやうでもあるが、情々考がへて見ると、随分思ひ切つた悲劇を演ずる奴もあるもんだね。』

善七郎は談話に夢中したのか、無意識に又一杯ぐいと呷つた。

六

「まあ、残酷な親達もあるもんで御座いますわね。」

玉枝は斯う言つて、下を向いたぎり、暫時は良人の顔を視やうとも爲なかつた。

「實にその兒を産んだ親は鬼だね。乃公と云ひ和女と云ひ、まだ小供の愛など云ふ事は経験がないけれども……然し、そんな残酷な事が出来る筈のもんぢやなからう。」

「……………まッ、眞個で御座いますわ。」

玉枝の聲は持前の初々しさを離れて、波打つやうに顫へた。

「若しも和女と乃公との仲に小供が出来たと爲たらば、和女は其兒を里に出す方が可いと思ふかえ？」

善七郎は又しても迂濶と空の猪口を唇へ宛行ひながら訊ぬるのであつた。

「……………」

玉枝は何物か胸に支へたやうな氣色で、視ぬやうに良人の赤ら顔を視上げた。

「乳が不足だつたら、此の節ではなに、牛乳もあるし乾酪もあるし、乃公など

は断じて里に遣るなんて、そんな愚な事は爲んね。」

『そりや郎君、無論の事で御座いますわ。それに嬰兒と云ふものは何うしても里親の感化を受け易いものだ云ひますから、若しもその里親夫婦が性質の好くない人達でもあつたら大變で御座いますもの。』

玉枝は然う何時までも黙つて居る譯にはゆかぬので、漸うの思ひで合槌を打つたのである。

『怎麼にもその通りだ。』

と、善七郎は我が意を得たりとやうに満足げなる笑みを湛へて、

『然うは云ふもの、ね玉枝、小兒なんて云ふもの、出来ん中が人生の花だよ。出来て見たらば可愛いものに違ひなからうけれども、乃公と女杯は、まだ結婚後満三月ともならぬのだから、少くとももう一年間は小兒なんか出来て貰ひたくないね。能く帝廟なんかへ行つても、若い奥さんが小兒を抱

へてギヤア／＼泣かせながら氣を揉んで居る所を見ると、寧ろ悲惨な感じが爲てならん位だ。』

『大きに然うで御座いますわね。』

と、は言つたもの、玉枝はその實良人の言ふ語が、一々、まともに耳には止りかねて居るのであつた。先刻良人の歸宅する前に、二階の欄干に凭れて海の方を眺めて居た時の寂しい悲しい氣分が、むら／＼と胸の底に湧き返つて、彼の時のいたいけな小兒の泣き聲がまだ其處等邊に聞えて居るやうな心細さを覺えるのであつた。随つてその艶やかな顔の色さへ失せて、善七郎が是までに見た事のない苦惱の影がほのめいて來たのであつた。

『玉枝、何うか爲やせんかえ？』

善七郎は只さへも細い目を絲のやうにして、玉枝の横顔を覗き込みながら訊ねた。

七

「いえ、何うも致しは……」

玉枝は張裂けるやうな胸の苦痛を怵へて、微かに答へた。

「何ともないかえ。なければ結構だが顔色が俄かにわるいやうな気が爲るよ。」

何ならば星製薬のビーナスでも飲んで見るが可い。」

「難有う御座います。本統に何處もわるいのでは御座いませんから……」

「本統にかえ？」

と、善七郎は玉枝が自分の前を遠慮して、無理に瘦我慢して居るものと思ひなして、執拗く寧ろ蒼蠅いほどに念を押すのであつた。

「本統で御座います。一寸只今ぞくぞくと肌寒いやうな感じが致しました丈
けで御座いますの。」

「風邪を引込むのは大抵然う云ふ時なんだから、もつと着物でも被て暖かに爲
とるが可いよ。」
善七郎は自分から炭取を引寄せて山のやうに火鉢へ炭を添ぎ補したのであつ
た。

「郎君、お酒を召上りませんか、御飯に遊ばしませんか。」

「然うだね。和女も食べるなら一緒に何しやう。」

「私……？ 私は何だか頂きたくないやうな気が致しますの。」

玉枝は實際御飯を食べるどころではなかつた。自分の胸深くに秘め匿してあ
る過去とそして現在のあらゆる罪惡の影が、鬼となり蛇となり火となり水とな
つて、一時に苛責の筈を振りかざしつゝ、犇々と彼女の身邊に押寄せて居るの
であつた。而もそれを何にも知らぬ善七郎に悟られまい氣取られまいと思ふ苦
心と忍耐とは、恰度崖上から落ちかけて居る大釣鐘を細い／＼棒一本で支へ止

めて居る危険さであつた。切れかゝつた大河の堤を板子一枚で食ひ止めて居る辛さであつた。何時か一度その大釣鐘が墜落ちずに濟まうか。何時か一度その大河の水が矢の如き勢で突破せずに濟まうか。

一體此の大危険、此の大苦痛、此の大不安の火中に在んで居る玉枝の過去とそして現在には、如何なる罪惡の秘密があるのであらう？、實の所、玉枝には善七郎と結婚する二年前既に相愛の男が出来て居たのであつた。そして二人が仲に一個の男の兒さへ儲けたのであつた。けれども、世間へは勿論、其頃新領士の守備隊附となつて不在中であつた父親——玉枝の父親は陸軍の大佐であつた——にも一切分らせずに、母親一人が萬事を取賄つて、男どの手を切らせた上、秘密に田舎へやつて産み落さした小兒の始末をも付けて了つたので、玉枝は即ち清淨無垢生れた儘の生娘に化け返つて、昨年の十一月月上旬太神宮の靈鏡の前にマンマと首尾好く善七郎の新夫人——花の花の花嫁と成り濟ましたので

あつた。

八

語を換へて言へば、玉枝は灰の如き眼潰しを善七郎に打掛けて居るのであつた。大龜裂の入つた水晶の玉を完全無缺の名玉と偽つて、善七郎の手に握らせて居るのであつた。生娘の假面を被つて、花羞かしき花嫁御の姿態を粧つて居るのであつた。その初々しげなる笑顔も語調も舉動も、總てが皆虚偽から出た付焼刃なのであつた。それが甚麼して罪惡でない云ふ事が出来やう？勿論世の中には玉枝と同じやうな罪惡を犯して居る女が數へきれぬほど有るのであらうが、數あるからと云つて、それが罪惡でないとは云へない。多くの男どもは皆それを知らずに濟まして居るのか、若くは知つて欺されて居るかの中なのである。

其處へ行くと、女は男よりもより大膽でそして圖々しくて、蟲が太く生れ付いて居るばかりでなく、偽りの假面を被るのに先天的の狡猾い狡猾い智識を備へて居るやうにも思へるのである。

玉枝は到頭座にも堪へがたいほどの眩暈を覺えて來たのであるが、總ての苦痛を唾と一緒に嘔み下して、熟と奥歯を啣ひ締つて、そして表面にだけは飽まで平生の華やかさと初々しさを粧はうと爲て居た。

何にも知らぬ善七郎は眞個玉枝が寒氣が爲るために顔色がわるい位に大積りをして居た。

「ちや私だけ飯を喰ふと爲やうか。然し、今夜に限つて一人で喰ふのは旨くないね。廢さう。思ひ切つて私も飯を廢して、もう一杯酒を飲むから、和女も日本酒が厭なら葡萄酒でも一杯附合つて見るが可いよ。」

「眞に然うで御座いますね。ではお語に従つて一杯頂いて見ませう。」

玉枝の心中では酒の氣でも藉りたならば、幾分か此の苦痛を忘れ得るかと思つたのであつた。

善七郎は定やを呼ぶまでもなく、自分で起つて飾り棚の上から葡萄酒の壺とグラスを取出して來て、玉枝の前に七分目ほど酌いで與へた。

「濟みません……」

と、玉枝は電燈の灯に瑤瑤の紅が透き徹るやうな葡萄酒のグラスを引寄せ、眼を瞑つて半口ほどぐいと飲んだが、その時不圖頭の中では、

「これが若し毒藥であつて呉れたら……」

と思つた。今夜と云ふ今夜、玉枝はしみくくと自分の罪が恐ろしくつて堪へきれぬのであつた。

それでも酒精分の効驗は恐ろしいもので、僅か七分目ほどの葡萄酒を飲み盡さない間に、彼女の臉から頬の邊へかけて、朝櫻のほんのりとした淡紅が浮

いて来た。善七郎は又その美しさを肴に上機嫌で五六杯を過ぎた。

「玉枝、酒の上で言ふぢやないが、人間は一生涯今の和女と私のやうな氣分で居たいもんだね。外は雪が降らうと槍が降らうと其塵事は關はん。私と和女との心地さへ此の通りの春でさへ居れば可いんだ。はッ、は、は、然うぢやないか？ねえ玉枝。」

玉枝は羞しさに袂の先に吸ひ出して居る眞綿の塵を撈つた。

九

逸郎は今、自分が夢から醒めたのか、夢の方から自分が突き醒まされたのか見境の付かぬやうな氣分で、むくと蒲團の上に起き直つて居るのであつた。

天井の板は可なり灰色に燻ぶつて、電燈の球が申譯のやうに力ない光を自分の膝の上に投げて居た。その薄暗い膝の側に白粉臭ひ一個の若い女がぐうぐう

白河夜船で寝て居る事を氣附いた時、逸郎は身顛ひの爲るほど一種の恐怖しさを感した。

「玉枝、何うして和女は僕を捨てる氣になつたんだえ？」

逸郎は誰に言ふ了簡でもなかつたが、偶然に這麼吐きか唇の外へ迸つたのであつた。で、その後から直にばツと氣付いたやうに自分の口を袖に蔽つて、何事も知らぬやうな顔して天井を見て居た。

「白井さん、郎君又起きてらつしやるのね。玉枝さんの事が氣になつて睡られないんぢやなくて？可いわ。どうせ然うでせうよ。」

全身白粉で塗りつぶしたやうな女は、斯う言ひながら起き直つて、無理に男の愛を自分の身體に吸ひ付けたさうに眼を細めた。

「……………決して然うぢやないんだ。玉枝なんかの事は忘れに忘れきつてるんだけれども、夜半になると不思議に眼が醒める癖が付いて、酒でも飲まなき

や坐ても立つても居られない苦痛さを覚えるんだ。」

逸郎は苦いやうな儂ない笑を漏らして女の顔を凝乎と眺めた。それが必ずしも眺める了簡で眺めたのではないが、此の女の顔からでも幾分の慰藉を取り寄せたいと思ふ軽い希望からであつた。

「……………ぢやない事はないでせう。どうせ私なんかは郎君の眼中にはないんですものね。」

「莫迦な！其麼事があるもんか。此の上和女でもなかつた日には、僕と云ふものは死ぬより外はないんだ。」

「然う……………？郎君でも私をいくらか思つて下さる氣があつて。」

「……………」

逸郎はそれに對する返答の語に窮した。實は此の女の親切をそれほど本統の親切とは思つて居なかつたのである。天上天下逸郎に取つて命より金より大切

なもの玉枝より外にないので、その玉枝の後姿なりとも何うにかして夢にも見たいと冀つて居たのであつた。

その玉枝は疾の昔、花の花の花嫁御に化けて、藤本善七郎夫人と成り澄まして居るのであつた。

+

逸郎の今日此頃は表面で酔つて、腹で泣いて居る日ばかりがつかいた。斯うした女の傍に居ながらも、實はその女の顔を見るのさへも不快の種を増す許りなのであつた。

斯うした女！白粉で塗り潰したやうな斯うした女は、藝者でもない、淫賣婦でもない、つい半年ばかり前までは、自分の最も敬愛する友人の思ひ物であつたが、その友人が何うしたいきさつからか、他に新しい女が出来たために、こ

の女を切れ草鞋の如く振り捨て、去つたので、逸郎は不圖この女のさびしい便りない境遇に、自分が玉枝に捨てられた時と同じやうな哀れさを感じた結果、三度に一度最寄へ遊びに来た足次手に立ち寄つたのが、縁の糸の巻き始めとなつたのであつた。

然し、この女が果して、逸郎のために眞實の女であるか否かは、逸郎に取つて毫厘の問題ではなかつた。逸郎は何うにかして、玉枝の事が忘れたい、自分の頭から拭き取つたやうに玉枝と云ふ女の名前を忘れ去りたいと云ふより外に何の目的も何の思想もなかつたのである。

「お喜多さん、君は捨てられた女だ。僕は捨てられた男だ。捨てられた女と捨てられた男と斯うして對坐で酒を呑んで居るのは恰度屍骸と屍骸とが手を携へてお花見に出掛けて居るやうなものだ。夕暮の鐘の響きに花が散り出せば、屍骸と屍骸とが自然に消え失せて了ふより外はないのだ。」

「まあ、縁喜のわるい事ばかり言つてらッしやるわね。何うして郎君はそんなに陰氣らしい事ばかり言つてらッしやるの？」

お喜多は自分のさびしさと便りなさを無理に心の奥へ押包むやうにして、逸郎の顔を穴の穿くほど熟と視上げながら言つた。

逸郎はそれを幾分か氣の毒に堪へぬやうな氣持で、稍俯目がちに枕邊のコツプを手にながら、

「……………誰が好んで陰氣になりたい奴があるもんか。僕は情々味方のない人間ほど詰らんものは無いと思つてるよ。」

「あら、味方の無い人間……………その點から言つたら、郎君と私と何方がさびしいでせう。」

「冗戯ぢやない。捨てられた女とは云ふものゝ、君なんかは何うしてまだく濁山の男が附きまどつて居るんだからね。僕と来た日には實に可愛い子供ま

で出来た仲を無理往生に引裂かれて……それもまあ運命の成行なら諦めも爲るがね……全然陸軍大佐の令嬢——清淨潔白の生娘と云ふ資格でお嫁に行つて居るのは残酷だらうぢやないか。假りにまあ、お喜多さんが僕の身になつて考へて見て呉れたら何うでせう。」

「ほ、ほ、ほ、そりや私の方で言ふこつてすわ。男の方ツて云ふものは、世間が廣いから行く先々でどんな勝手な事でも出来ますけれども、凡そ捨てられた女ほど世の中に情ない苦しい術ないものはないでせう。私、玉枝さんをお慕ひになる郎君より慕はれる玉枝さんの身になりたくつてよ。」

十一

逸郎は何にも答へずに勃如とした様な眼付で、お喜多の顔を視て居た。お喜多はその如何にも睡さうな眼を細く睨いた。

「白井さん、郎君が其處に憐いばかり居らつしやる譯が初めて解せてよ。玉枝さんで方何れほど美人だか知らないけれども、その方の事ばかり旦ても暮れても思ひに思ひ込んで被在しやるからこそ、私の事なんか……本統に袂の底に残つた綿屑とも思つちや下さらないんだわね。好くてよ。私を捨てた男も憎いけれども、私を拾つて下さつた郎君の方が、今の私に取つちや一層憎いわ。」

斯う言つてお喜多は夜具の袖を自分の顔の半分どころまでたくし上げて、窈と静かに啜り泣くやうに齒を啣ひ締つた。

「憎いかえ？そりや僕を憎く感ずるのは當然の事さ。けれどもね、僕だつて君なんか少しも可愛いと思ふ念慮はありや爲ないよ。」

「ぢや、何うして私見たよなもの、許へ、入來して下さるの？」

「他に行く處がなけりや來るより仕方がないさ。」

「それで郎君の心持が幾干か……玉枝さんの名を忘れる補足になること？」
お喜多の細い眼は此時に限つて、或る物を射るやうにぎら／＼と光つた。そして彼女は何者にか突き飛ばされたやうにつと起き上つて、突然に逸郎の胸倉を犇と引摺んだ。

「危い。ひどい事爲るもんぢやないよ。」

と、逸郎は女の手を軽く抱上げるやうに爲ながら、心にもない笑ひを片頬に浮べた。

「白井さん、郎君後生だから玉枝さんの事忘れて下さる事出来なくつて？」

「………な、何を言つてるんだえ和女は………僕に本統の事を言はずりやね、

玉枝の名を忘れると同時に、お喜多さんの名も全然忘れて了ひたいんだよ。」

「本統に然うなの？……」

と、お喜多は幾分か安心を得たやうな容子で、男の胸倉を摺んだ手を少し弛めて、

て、

「………私を忘れて下さるのは、疾の／＼昔から覺悟の上だわ。その代りね

白井さん、私を忘れて下さるやうに玉枝さんの事も悉皆忘れて下さる？玉枝

さんの事も忘れ、私の事も忘れて下さるなら、それこそ双方に怨みツこがな

くて寧ろ諦めが好い事よ。」

お喜多は又しても一旦弛めかけた手をぎうと引絞るやうに強めて、そしてヒ

ステリーの的に逸郎の面を睨むやうに凝視めた。

「か、か、勘辨しとくれよ。僕は決してお喜多さんを玩弄物に爲る氣で、斯う

した關係になつたんでも何でもないんだ。捨てられた女と捨てられた男が一

緒に遇つて話して見たらば、多少は良心の慰藉と安心とを得るだらうと思つ

て………つい斯うした仲になつただけでも、實はね、お喜多さん、君が若

し男だつたら、僕の代りに大森へ行つて、一思ひに玉枝を刺殺して來て貰ひ

たく思ふよ。」

「えッ、玉枝さんを私に刺殺して来いッて被仰るの？」

只さへもヒステリーの的のお喜多の顔は血を打掛けたやうに赤くなつて、胸の鼓動がどくきと聞えた。

「なに！刺殺して来いとは言はんさ。それ位に僕は心の中で癪に觸つて居ると云ふ事さ。」

「来ますともね。私、郎君のお囑みとあれば殺人しでも何でも……屹度爲てお目にかけてよ。其代り、郎君も私と一緒に死んで下さる？」

逸郎はわるい事を口走つたと思つて、今更のやうにコツプを手に爲ながら、例の灰色の天井を視て居た。言ひおくれたが、お喜多の家は京橋の新富町の只ある裏横町であつた。

十二

「玉枝、乃公は好い兒を借りて来た。早く来て見なさい。」

善七郎は湯から歸りがけのだらりと爲た姿で、戶外から一箇の愛らしい男の兒を抱きながら歸つて来たのであつた。

聞き付けた玉枝は、慌だしさうに玄關へ駆け出して、裾の亂れたのを急に絞る様に掻き合せた。

「まあ、お歸り遊ばせ。何時もよりは大變お湯が長いやうだと思ひましたが、そりや何方のお兒？」

「何方のお兒はひどいね。久永が折角近所へ移轉して来たのに、ついぞ一度も寄つた事がないから、今日は何心なく手拭を提げたなりで覗いて見たのさ。するとね玉枝、實に………實に不思議な事があるぢやないかえ、此の兒が

……ね。』

と、言ひながら善七郎は自分の膝に抱いて居た子供を玉枝の眼前へ差付けるやうに向け直して、

『ね、玉枝、乃公だつて和女だつて、まだ子供の味なんかは知らんけれども、此の兒がね、初めて乃公の顔を見るや否、火の付くやうな聲を出して乃公の膝へ抱き付かうと爲るのさ。何ぼ子供の味を知らん乃公でもね、それを憎いとか面倒臭いとか思ふ筈はないだらう。思はず兩手を出して、さアおいでと言つて見る氣になつたのさ。するとね、玉枝、此の兒が紅葉のやうな可愛い兩手をひろげて、乃公の事を「とうとう」と言ひながら飛び付いて來るのさ。乃公は覺えず此の兒の手を取つて抱きながら、接吻を爲たんだ。玉枝、和女の眼からは甚麼に見えるか知らんが、乃公は久永の方に異議さへなければ……どうせ久永夫婦だつて、彼あした事情で脊負ひ込んで困つてる兒なんだ

から……今夜からでも此の兒を引取つて可愛がつて見たいと思ふんだが、和女多少の世話をやいて呉れる氣はないだらうか?』

玉枝は善七郎が這麼に長い物語りの間を只一つの瞬きさへ爲すに凝乎とくその小供の顔ばかり見詰めて居たが、不思議とその呼吸が刻一刻毎に亢ぶつて來るのであつた。そして良人に對する挨拶の一語さへも唇の外には出し得ぬのであつた。

『玉枝、和女は不承知と見えるね?』

善七郎は餘りに玉枝が不承らしい顔付のみ爲し居るので、寧ろ不平さうに問ひ返した。

『……………』

玉枝はそれにも亦一言の挨拶も返さずに良人の膝の上からその兒を抱き寄せ、抱いてく抱き潰すやうに抱きながら、そのふっくりとした眞白い頬

に、燃ゆるやうな熱い紅い唇をくっつけた。

十三

善七郎は玉枝の振舞が餘りに突然であつたのにも驚いたが、其非常識と云ふよりは寧ろ狂人じみた遣り方には一層肚膽を抜かれた。

「おい、玉枝、和女は乃公が折角久永の夫婦から借りて來た兒を何う爲る了簡なんだえ？」

「いえ、何う致す了簡でも御座いませんけれども……。」

と、玉枝は良人の聲が何時になく激しかつたのに氣付いて、ハッと取直すやうに顔色を改めながら、膝に抱き上げて居た兒を疊へ卸した。然しながら、その切れの長い眼の視線はまだ飽までも子供の面に注がれて居た。そして子供の眼も亦何等かの不思議が籠つては爲ないかと思はるゝほど強く執拗く熱心に玉

枝の美しい顔に引付けられて居るのであつた。泣きも爲す笑ひも爲すに當一生懸命に玉枝の美しい顔ばかりを凝視めて居る態が、更に一倍善七郎に取つても玉枝に取つても、憎い可愛いの問題を離れて、一種の奇異を感せしめずには措かなかつたのである。

「……郎君、此の兒を貰はうと被仰つても、まだ久永さん御夫婦の考へをお確めになつた譯でも御座いますまいし、私達夫婦だつても、結婚後半歳とも経たない……そんな事申しちや可笑う御座いますけれども……是から先三人の子供が出来るか五人の子供が出来るか知れたものちや御座いませぬのに、何ば可愛い好い兒だからと申して、今からこんな素性も知れない者を貰ひ切りに爲て了ふと云ふのは、餘り早手回し過ぎるやうに感じられますわね。」

「それく？玉枝、和女が今素性も知れぬと言つた語で、乃公も思ひ出した事があるんだ」

と、善七郎は疊の上に兩足を投げ出して居るその兒の手を掴んで「どうのお膝へ乗つといで」と無理に引寄せつゝ、

「この兒はね、玉枝、久永夫婦の口向に依ると、或る立派な陸軍の佐官の令嬢が附近に居た青年畫家とか小説家とか云つたが……その點は久永夫婦にも正確には分つちや居らんらしいが……何でも藝術で飯を喰つとる男に戀して、

その仲に出來た兒らしいと云ふ話なんだが、陸軍の佐官と云へば和女も矢張り陸軍大佐村田周臣氏の娘でもあり、長い事女學校にも通つて居た事だから、多少夫等に就いて似寄の風説でも聞き挾んだ事はなかつたかね？」

善七郎の方では左して深い意味があつて訊ねた譯でもなかつたのであるが、聽いて居た玉枝の方ではもう「陸軍の佐官の……」と言はれた時に、自分の胸へ五寸釘を打込まれたやうな苦痛みを覺えて、面色が土と變つて居たのであつた。

十四

善七郎は細い眼の眦を稍角を立て、睜いた。そして訝しさに玉枝の顔を凝視めた。

「玉枝、先達ても和女と此の子供の身上に就いて話を仕出した時、和女は碌々返答も爲ないで、妙に顔の色を變へたが……今夜も亦大層氣分がわるさうに爲て、顔の色がめき〜と變つて來たやうだね。何か和女、此の子供の事に關して聞き知つとる事でもあるんぢやないかえ？あるならあると、淡白に話を爲て呉れたら何うかね。」

左らぬだに五寸釘を打込まれた様な苦痛を胸に抱き、居た玉枝は、又更に鋭利なる刃物でも眼の前へ差付けられたかの恐怖しさを感じたのであつたが、然し、女の肚胸は此處ぞとばかりの大勇氣——大決心を無理に奮ひ起して、忽

ち今までの玉枝では無くなつて了つたのである。

『まあ、驚きましたわ、郎君にも似合はないことを被仰るぢや御座いませんか。私か何だつてそんな女の事や、その女の産み落した子供の事なんか知つて居る筈はないぢや御座いませんか。若しも亦何うかした縁故で知つて居るとしたらば、郎君からお訊ねを受くるまでもなく悉皆お話を致して了ふのが普通のこつて御座いませう。何の必要があつて、自分に關係もない事を秘し立て致すもんですか。』

良人を欺むき自分を欺むかうと爲る玉枝の辯舌は、寧ろ凄まじいほどに冴え／＼として、そして白々しさの限りを盡した。言ふまでもなく、その顔付も眼光も、平素の善七郎の眼に浸み込んで居る優しき初々しき玉枝では全然無かつた。

善七郎は心私かに何等かの不快を感じずに居られなかつたが、唯軽く『ふ』

う』と笑つて、性來の細い眼を相變らず細くして居た。

『いや、玉枝、乃公だからとて何も、此兒が和女に出来た兒だと言ひはせんぢやないか、只陸軍の佐官の令嬢の産んだ兒だと云ふ風説を久永夫婦から聞いて來た所だから、和女に世間話の一ツとして聞いて見たまでの事さ。然う和女の様は無氣になつて向つて來られぢや、少々閉口をせざるを得んね。乃公は兎に角此の兒を久永の許へ返して來やう。』

善七郎は既での事に其兒を抱き上げて、も一度外へ出かけやうとする所であつた。と、今までまじ／＼として玉枝の顔ばかり見て居たその兒は、急に駄々を捏ねるやうに頸と肩とを一緒にゆすつて、額に八の字を寄せながら、べそを掻き出したのであつた。

『郎君、此の兒をお返し下さるなら、定やにでも岩雄さんにでも連れさしてお遣りになれば宜しいぢや御座いませんのか？何も郎君が態々お連れにならなく

たッて……。」

と、玉枝は故意にその兒に對して深き愛情も未練もないらしい態度を装ひつゝあつたが、その口の下から直ぐ、

「ですけれども郎君、此の兒の名前は一體何と云ふんでせう？」
と、質ねて、我を忘れたやうにその兒の顔を見入つた。

十五

「うむ、名前かえ。此の兒の名前は慥か久永が姓名判断を爲て貰つて勝手にくッ付けたんだとか言つて居たが、逸郎と云ふんださうだ。」

善七郎は斯う答へながら、もう子供を引抱へてすたくと表玄関の方へ出て了つたのである。

「まッ、逸郎……ッて？」

玉枝は飛上る様に喫驚して、一しきり座蒲團の上に突ッ俯したが、僅かに元氣を取直して、臉を抑へながら起き上がった時には、勿論善七郎と子供の影はなかつた。

「奥様、旦那様は又お出ましになりましたんで御座いますね。」

定やは玉枝が此の家へ嫁ぐ以前も以前、五ヶ月も以前から善七郎の許へ傭はれて来た女で、女としての美など云ふ事は、殆んど擧げつらふほどの資格はないが、萬事に能く氣の付く、何方かと云へば如才のない中年増なのであつた。

「おう、定やかえ、別に遠方まで入ツた譯ぢやないんです。近頃近所へお引越しになつた會社の久永さんのお子供を借りておいでになつたので、今それを返しにおいでなすツたのよ。」

と、玉枝は今までのゆくたてを一切素知らぬ顔して、左も鷹揚らしく落着いて答へた。

『あら、左様で御座いますか。旦那様もお見掛に寄らない子煩悩なお方で被在
しやいます事ね。』

と、定やは何の意味もなく硝子入りの障子越しに縁側の方を差覗く如き格好
しながら、

『奥様、着かぬお話を致すやうで御座いますが……あの、女と云ふ者は一旦男
と結婚してから、その後又別の男と結婚するやうな場合がありましても、年
齢さへ若い中なら、何時でも生娘で押通されるもので御座いませうか？』
定やは内々自分の別戀にして居る家に、斯うした事情の女があるので、つい
心安立てから玉枝に話しかけて見たのであつたが、折も折！この時の玉枝に
取ては、善七郎から五寸釘を打たれた時以上の痛苦と恐怖さを感じたのであつ
た。のみならず、良人の善七郎とこの定やとが何時の間にか心を合して居て、
そして故意に自分の身の上を確かむべく、責め付くるのではあるまいかとさ

へ感じたのである。

『……………そりやね定や。私にだつて然うした境遇になつた経験があ
る譯ぢやないから、何方が何うと云ふ返答は出来や爲ないわ！けれどもね、
和女、突然に妙なお話を持ち出したもんだわね。』

『はい、突然には遠い御座いませませんが、實は私の知つた人の縁談事に付いて、
少しその邊の事情を知つときたい譯が御座いますので……つい。』

と、言ひ果てぬ間に、主人の甥の岩雄がみしくと玄關の方から蹠音を響か
せて來ながら、

『お定どん、何處の人か知らんが婦人のお客さんが、俥でやつて來ました。僕
は婦人のお客さんと應接するのは頗る閉口ぢやから大至急速達郵便で君が出
て呉れ給へよ。』

岩雄は無遠慮に、自分の報告を投出した儘で、逃げるやうに立ち去つて了つ

た。

十六

『えッ、御婦人のお客さまが？』

と、定やよりも先づ玉枝が怪乎としたやうな聲で言ひかけたが、

『必然そりや小石川の阿母さまか……左もなけりや静岡の兼子さんが久々で東

京へ遊ひに来ると云ふお手紙があつたから入ッしたのかも知れないわ。』

と、深く考へもせず取極めて了つた。

『定や、何の道岩雄さんちやお取次が何でせうから、和女能くお名前や何かを伺つて見て下さいよ。』

『畏まりました御座います。』

と、定やはそこくに起ち上つて、玄關へ行つたが、やがて天下の一大事で

も湧き起つたかのやうに引返して来た。

『もし〜奥様、小石川のお宅からでもなければ静岡の御親類でも名古屋のお知己でも御座いませぬの。何だか存じませぬがあ、眞白に白粉をお塗けに

なつた二十三四の御婦人の方で……お名前はとお聞き申しましたらばね、只

「手前は喜多子と云ふ者で、京橋の新富町から参りましたが、是非々々御當家

の奥様にお目に蒐つてお願ひ致したい事があるから……」と、是丈を被仰る

んで御座いますの。では御用向の概略を被仰つて頂きたう御座いますと申し

ました處「それは少し秘密の事なんだから、何うしても一應奥様に御面會致

さない中は……」と、まあ、斯様に被仰るんで御座います。矢張應接へお通

し致して置きますで御座いませうかね、奥様。』

と、定やは自分からもう眼を圓く爲ながらおどくして居た。

『然う……京橋の新富町の人で……喜多子さん？學校時代のお友達やなんか

ら、名前よりは寧ろ姓の方を被仰りさうなもんだにね。それで加之に秘密の話があるなんて……譯の解らない人が來れば來るもんだわね。」

玉枝は暫時熟と小腕を拱いて考への緒を彼方此方と撰り分けて見やうと努めたのであるが、何うしてもその喜多子なる婦人が何處の何者であるかも分らないし、況して自分に秘密の用事云々と言ひ込んで來た理由などは尙更分りツこないものであつた。

「餘りと云へば變手古だわね。定や、念の爲めにもう一度聞き質して見て頂戴よ。」

玉枝は昨日あたり結はせた艶々しい佐渡屋形の丸鬘の鬘づらを、螺鈿入り金蒔繪の櫛で二三遍忙しげに梳き上げながら、斯う言つて火鉢の前を離れた。

定やは主命拒みがたくて「では然う致して見ませう」と言ひつゝ、復び玄関の方へと馳せたが、五分間とも過ぎない間に又立ち戻つて、

「奥様……白井逸郎さんと云ふお方の事に就いて入ッしたんださうに御座います。」

十七

「何ですツて？しツ、白井逸郎なんて、わ……わ、わたし、夢にも記憶してない人だのに。私、變で〜仕方ありやしないわね。兎も角もね、定や、和女にお任せするから、思ひ切つて斷つて頂戴よ。」

美しい玉枝の顔は、先刻子供の手で善七郎から釘を打たれた時以上の大變化をしたのであつた。其には言ふ迄もなく、魔物にでも追ひ詰められたやうな戦慄と恐怖さが充ち満ちて居るのであつた。

何等無關係の定やでさへも、是には勘からず喫驚した氣色で、姑くは瞬きも得せず、その顔を凝視するのみであつた。

「そりや奥様、断れどの仰せならお断りも致しませうが、二度も三度もお名前を聞き質したり、用向を訊ねたり致した後になつて、只そんな人知らないからと申すのも随分變なもので御座いますわね。何なら五分間でも十分間でも御面會遊ばした方がお宜しいでは御座いませんか？」

「厭ですツて云ふのにね！定やにも似合はない。旦那様のお出ましの後で、一家の妻たる者がそんな異體の分らない人間を家へ立ち入らせて、秘密らしい話なんかが出来るもんじゃないぢやありませんか。關はないから、早く何とでも言つて断つて頂戴ツてば。」

此の場合玉枝の心中では、良人の歸宅せぬ間に寸刻も早くその者を追ひ返さうと思ふのが、最先の目的なのであつた。

「……………まあ本統に困つちまひますわね、では仕方が御座いませんから、奥様、私……………あの急に御氣分がおわるいからと申して見ませう。」

「それが可いわ。其處を巧く和女の頓智で歸らして下さいよ。」

「……………」

定やも實際當惑しきつた顔付で、泣き出しさうに爲ながら、三度目の歩みを玄關の方へ向け直したのである。と、それと同時に、玉枝は左右の返答をば待構ふべき餘裕さへなくつと起ち上つた。そして疊障子に罪でもあるかの如く、荒々しくも廊下へ立ち出でたが、夫なりすたくと自分の化粧室と定められた彼の奥二階の階子段を駆け昇つて了つた。

困つた上にも困りぬいたのは、定やであつた。何とか體好く断りを言つて見る了簡で、三度目に玄關に立ち現はれた時には最早やその喜多子と稱する白粉づくめの女は、コートも脱げば、下駄も脱ぎ捨て、取次の室の電燈の真下に泰然として坐り込んで居るのであつた。

「寒い所にお待たせ致しまして、誠に相済みませんでした。奥様はあの只今急に烈しい御腹痛が起りましたので、御醫士の方へ電話を掛けたり爲て居る最中なんで御座いますから、折角では御座いますが、御面會の事はお断り致して呉れとの事で……。」

と、定やは一世代の名智を揮つて、きつばりと女の前に兩手を支へたのである。

「あら、急に御腹痛で被在るんで御座いますか。」

と、喜多子は心持腫を空に付けて、當惑さうに膝を撫でたが、

「……是非々々お目に蒐りたい了簡で、東京から遙々参りましたんですけれども、御病氣とあれば致し方御座いません。ではね、貴女にお願い致します

すがね、實は斯う云ふ事もあらうかと思ひましたので、私、手紙を持つて参りましたから、奥様の御腹痛がお癒りになりましたら、是をお渡し下さるやうに願ひます。」

と、喜多子は帯の間から一封の手紙を取出して、定やに渡した。

定やは何の氣もなく、掌を差出してそれを受取つて見ると、淡紅色の封筒の中に、正しく手紙の入つて居るには違ひないらしいが、然しながら何うやら普通一遍の手紙と違つて、目方が變に重いと思つた。

「左様で御座いますか、此のお手紙を奥様にお上げすれば宜しいんで御座いますね。」

「何卒お願い致します。少々大切な物が封じて御座いますから、お間違ひのないやうにね。」

と、喜多子は白粉づくめの女でこそあるが、言語なり舉動なりが、なか／＼

テキハキと爲て居るので、定やの方が少しく切り捲られの氣色さへ見られた。

『確かにお手渡し致しますで御座います。』

『何卒何分……。』

と、喜多子は初めて脱ぎ捨て、置いたコートを引寄せ、玄關先に待たせてあつた車夫を鷹いたが、その眞白い白粉の顔には、可なり忌々しさうな、可なり疥癩に觸つたやうな色が漲つて居ぬでもなかつた。

『左様なら。』

びしやり玄關の硝子戸を閉めて、車夫を後に従へながら、門外へ出かけることもなく、殆んど十歩か二十歩ばかりも摺れ違ひに、久永の家へ子供を返しに行つた善七郎が、何となく氣の進まぬらしい足取りで、うそ淋げに立ち歸つて來たのに出遇つた。

十九

幸ひに門柱の電燈が惜氣もなく光つて居たので、善七郎も女も明白と互ひの顔を見定むる事は出来たが、女は軽い會釋の眞似して、車夫と一緒にすたくと通り過ぎて了つた。善七郎は稍少時後姿を見送つて居ながら頗る怪訝さうに眉を顰めた。

『何者だらう、今時分俾などで來て？ 豈夫に會社の者の細君とも見えんやうだが……呼び止めて聞くのも變なもんだし。』

其が今、妻の玉枝を訪ねて來た女とは全然思ひも付かなかつたので、是もやがて自宅へ入つた。

『今歸つたよ。』

と、善七郎はつか／＼玄關から上つて、平生の居間へ來て見ると、自分を待

ちかねて居るべき筈の玉枝が見えない。のみならず、其處邊を振返つて見ても定やの影さへ見當らないので、善七郎は一種物足りない不興の念に驅られざるを得なかつたのである。

「玉枝、玉枝は居らんのかえ。」

と、少し聲を張上げて呼んで見ながら、奥二階の方へと足を向けかけたが、ちよつと舌打をなしつつ、火鉢の前にごつかりと坐つた。

「晝間とも違ふから豈夫に定やを連れて海岸へ散歩に出たんでもあるまい。」

「詮事なしに今度は甥の岩雄の名を三四遍嘸鳴つて見ると、岩雄丈はそれでも自分の室に勉強でも爲て居たものと見えて、おくればせながら出て來た。」

「叔父さん、何か御用ですか。」

「何か御用ぢやない、玉枝と定やは何處へ行つたのか？」

善七郎は既う可なり中腹の語調であつた。

「僕は一向に知りませんが、多分奥二階ぢやないでせうか。」

「何ぼ奥二階だつて、乃公が歸つて來てこんな嘸鳴つどるのが聞えん筈はない。華族様のお屋敷内ぢやあるまいし。」

「叔父さん、僕に怒つても困りますよ。兎に角行つて見て來ませう。」

と、岩雄は時ならぬ劔突を喰はされた腹立まぎれ、廊下を幕地に走せて奥二階へ急いだ。

一體善七郎の住宅は左して大邸宅と云ふ程でもないが、それでも價の安い地面へ思ふ丈の庭も取れば、家も新築したのであるから、階下の居間から二度三度嘸鳴つた位では、容易く奥二階まで達し得ないのは無理もないのであつた。それに浪の音、風の響きが絶え間なしにざわめいて居るので……。

岩雄が奥二階へ馳上つた時には、恰度定やが慌だしさうにして、階下へ降りて来やうと爲る所であつた。

「お定どん、困つちまふね、僕は今思ふさま叔父さんから嘸鳴り散らされたぢやないか。」

「まあ、旦那様がお歸り遊ばしたんですか。些とも氣付かずに居たもんですからね。岩雄さん、勘忍して頂戴よ。明日は澤山お薩を奢りますからね。」

「莫迦に爲ちや不可よ。君よりか叔父さんは小母さんがお待ちかねなんだから小母さんに早く階下へ入らっしゃいと云つた方が可いんぢや。」

「あら、岩雄さん、奥様は今、御腹痛で大變苦んでお在遊ばすんだから、とても階下へなんか入ッしやられや爲なくてよ。」

「小母さんが御腹痛？」

と、岩雄は一寸意外らしく眼を睜つたが、

「お定どん、旨く買収せられたんぢやね。」

「何を言つてるんです、岩雄さんは。嘘と思ふなら、昇つて見たら可いでせう。」

定やはその實、岩雄の推察通りルビー入の金指環一個で、悉皆玉枝に買収せられて了つたので、世間馴れぬ岩雄にも、前後の關係上何となくその氣態が薄々ながら推測する事が出来たものらしい。然ればこそ、定やは故意にぶり／＼と爲ながら、岩雄を突退ける様にして、大急ぎに善七郎の居間へ驅け付けたのであつた。

「旦那様、誠に／＼相済みませんで御座いました、實はあの……あの實は……」

あの只今……只今あの……」

「おい／＼定や、和女は何を一ツ事ばかり繰返しとるんだ。一體全體玉枝は何うしたのかえ？」

善七郎は無遮苦遮とした顔付で、細い眼をばしや付かせながら急ッ込んで訊いた。

「……はい、奥様で御座いますか。奥様はあの……先刻から大變お腹がお痛み遊ばしますやうで……た、た、只今私が懷爐を拵へて差上げました所へ、恰度旦那様がお歸り遊ばしましたので、つい存せず居りましたので、誠に誠に申譯が御座いませんで御座い……。」

と、定やの辯解は流石に手の入つたものであつた。

「然うか、急に腹痛が爲るので奥二階へ……？然し、それならば何も、奥二階まで引込まんでも平生の寢室で好かりさうなもんぢやないか。」

「それがで御座います、何か御用がお有り遊ばして奥二階迄お在遊ばした時に突然御腹痛がお起りになつたので御座いますやうで……。」

「それならそれで已むを得んとして、おい定や、今方自宅の門から出て行つた

若い女は彼りや誰を尋ねて來たのかえ？」

善七郎の斯う言つて訊ね直した語は、平生の穩健柔和なる彼の調子と違つて氣の加減ばかりでなく、殆ど噛み付くやうに鋭く聞えた。

萬事を鵜呑みの定やも、覺えずびりゝとして一二寸後退つた。

二十一

「はい、彼の女の人で御座いますか、彼れは私の古いく知己で御座いましてお喜多さんツて云ふので御座います。」

岩雄の推測通り、定やは悉皆玉枝に買收せられて、一切犠牲となる覺悟とは知られた。

「然うか。和女の知己で和女を訪ねて來た者なら、そりや別に不思議もなければ議論もありはせんが……恐しい白粉で塗り固めたやうな女だね。加之に車

夫など引連れて居るから、乃公は實に異體が分らんかつたよ。はッは、は、は。

善七郎は腑に落ちたやうな落ちかねたやうな哄笑ひを定やの眞正面から浴びせて、

「とは云ふものゝね、和女の知己だと云ふものを乃公が何ぼ主人だからというて、むげに蔑す理窟はないんだ。定や、赦しとくれよ。乃公は今夜少しく頭腦が何うか爲とるんだからね。」

「あらまあ、旦那様からお詫など致されましたは、私、穴へでも入らなきやなりません……。」

『なアに、穴へ入らんでも海が近いから、本統に濟まんと思つたら海へでも入るさ。』

と、善七郎の皮肉は飛んだ所で勃發したのであつた。

「まあ、お口のわるい。」

と、定やも平生主人が是位の皮肉を言ふ事を承知して居るので、故意に冗戯のやうに受け流しては居たものゝ、心中では無論勘からの不安を抱いて居るのであつた。

善七郎は無理にも一切を忘れたやうな容子で、

「可いわ。此處で和女と乃公とが議論を闘はした所で、傍聴しとるものは天井の鼠ばかりだ。それよりは乃公は玉枝の病氣を見舞つてやるを爲やう。」

善七郎は何と云つても、玉枝以外に女のない國と心得て居る男であつた。自分の心に濟まぬ事があればあるほど、不愉快な事があればあるほど、疑はしい事があればあるほど、玉枝の顔を見ずには何うしても濟されない男であつた。

彼は斯う言ひながら突ツ起ち上つて——下卑た語で云へば——のこくと奥二階の玉枝が化粧室へと辿つたのであつた。

「玉枝、腹工合が好くないさうだね。何うだえ少しは癒つたかえ？」

嘘の皮を蒲團に被つた玉枝は、良人の聲を聞くと等しく、何かは知らず「あれッ」と叫んで、左も氣でも狂つた人間の如くに、むくとばかり褥の上に戻つて見せたが、その下から直に嫣然と笑つて、

「まあ、郎君で御座いましたの。私、今うとくと爲た間に怖しい怖しい夢を見てました最中だったもんで御座いますから、つい何の辨別もなしに失禮致しまして御座います。」

と、羞しさうに褥を這つて、良人の前に突俯したが、その頸脚の水際立つた眞白さは、善七郎ならずとも、眞に見惚るゝばかりの美しさであつた。

二十二

「玉枝、安心するが可い、和女が何うやら不賛成らしい顔付だつたから、子供

は今久永の夫婦に返して来た處さ。」

「まあ、左様で御座いましたか、それは可う御座いましたわね。」

善七郎の語調が殆んど平常に復して居たので、玉枝も内心覺えず「まあ好かつた」と、吐息を吐いたのであつた。今来たお喜多と云ふ女の事などは、無論おくびの先へも出さざりころではなかつた。然し、相變らずの不安と恐怖とは斷續なしに彼女の身邊に附纏つて、ともすると、執拗き亡者の如く彼女の頸髪を引摺まうと爲て居た。

「玉枝、腹工合が癒つたら、階下へ行つて紅茶でも服まんかえ。」

「はい……では左様致しませう。」

とは答へたものゝ、玉枝は何だか變に進まぬやうな顔付で、うじくして居た。

「強て厭なら、義理にでもと云ふ譯ぢやないんだがね。」

と、善七郎は不平さうに頬を膨らせたが、

「玉枝、和女が又妙に癖んで取つて呉れちや困るがね。和女の阿母さんと云ふ人は、見掛ばかりでなく、なか／＼確乎した氣性のやうでもあり、従つて家庭上の切盛から子供達の薫陶方も、寧ろ舊式に過ぎるほど嚴格な事は、乃公も疾より承知しきつとるんだけれども、不思議と和女はその割合に然うでもない様ぢやないかえ？」

と、頭もなければ尻尾もない様な突然の質問を發した。

黙つて眼を圓く爲ながら聽いて居た玉枝は、忽ち我が秘密の鍵を良人の手に奪ひ取られたやうな感じの爲ぬでもなかつたが、表面には飽まで解しかねた態を粧つて、然も、幾分良人を蔑むやうな眼付を示した。

「郎君、何を被仰るのかと思へば……それではあの、私の爲る事爲す事が不行儀で仕方がないと被仰るんで御座いますか、宜しう御座います。到底私……」

私なんか至らない我儘育なんで御座いますから、それほどお氣に召しませんものなら、何もそんな謎みたやうな迂遠な事を被仰らないでも、手を把つて教へて下さつたら宜しいぢや御座いませんの、宜う御座いますわ、私、明日にも早速實家へ參つて、阿母さまによく／＼此の事を申しますから……。」

と、玉枝はもう涙に聲を顫はせかけたのであつた。

「困つちまふね。だから和女にや碎けた話が出来やせんよ。」

と、善七郎は稍當惑さうに小鼻へ皺を寄せて貧乏ゆるぎ爲ながら、

「和女が然う云へば、乃公も思ひ切つて聞いて見たい事があるがね。」

と、一揺り小膝を前へ乗出し、

「玉枝、和女の心中には常に乃公にも言ふ事の出来んやうな不安の雲が宿つたりやせんかね？」

と、眞向から一本。

「えッ、不安な事が私に……………」
 言ひかけて、玉枝は魅するやうな眼元に凝乎と五分間ばかりも良人の瞳を噴つた。肩の邊ではあやしくも押迫つたやうな荒い苦しい呼吸を爲て居た。

「……………」
 善七郎も暫時はそれに引付けられたやうに、びたりと黙つて、自分を凝視する玉枝の顔を同じやうに凝視めた。沈黙とそして寂寞——相對したる二人の間には、何とも云ひがたい一種の暗黒な濕ッばい空氣が雨雲の如く流れた。

「……………」乃公の邪推だらうとは思ふがね、玉枝、何う見ても乃公の眼からは和女に何等かの不安が潜んだるやうに見えてならんのだよ。斯うして夫婦になつた以上は、互に物を秘し合ふ必要なんか毛頭ありはせんよ。い

や、必要不必要の段は措いて、善い事も悪い事も陰陽なく明し合ふのが夫婦でもあり、又家庭圓滿の基礎と云ふもんだらうぢやないか。」

「怒つちや不可よ。玉枝、無けりや無いと判然と言つて呉れさへすりや、それで乃公の氣が済むんだよ。和女は一體、乃公を何と思つとるか知らんが、乃公は決して和女の事なんか……………」

と、善七郎は一入聲に力を籠めて、

「本統にこれんばかしも疑つてや爲ないんだ。いや、多少疑ひを挟むべき事件があつたと爲ても、誓つてそれを疑ひたくないんだ。鏡の上に現はれた曇りがあつても、無理に拭き去つて、飽まで元の明かな鏡として心ゆくまで眺めて居たいのが乃公の希望なんだから、只和女が然うした心持で乃公を取扱つて呉れる事さへ出来れば、それで乃公は満足しとる譯なんだよ。」

と、嚙んで啣める様に言つて、又更に玉枝の返答を促さんと爲るものゝ如くであつた。

「……………存じません、私は。」

可なり忘れた頃になつてから、玉枝はきりりと眉を逆釣らせながら、くりと箆筒の方へ向き直つた。

「そ……そ、そんな事を被仰いますなら、私には……私には何卒お暇を頂かして戴きます。」

と、刺すやうな然も顛への波を帯んだ聲で言ひ放つた。その我儘の舉動の中にも、例の初々しさが矢張り失はれずにあるのが善七郎に取つて萬更嬉しくないでもなかつた。

「だッ、誰が和女を離別すると言つたか。だから和女には手が付けられんこと云ふんだ。」

と、善七郎は自分ながら稍言ひ過したわえと氣が付いたので、俄かに玉枝の肩を軽く擦るやうに爲ながら、宥めにかゝつた。

春淺き夜の海岸の家は、きやくくと肌寒さを覺えた。

二十四

逸郎は今或る雑誌社から囑まれた主觀的短篇小説を書き了つて、疲れきつた眼にそれを繰返して見ながら、ところどころ假名違ひや句點の誤謬を訂正して居る所であつた。そして此の小説の標題を何と極めるのが適當であらうかと、獨り頻りに腐心して居る最中なのであつた。

ペンを持つ手先は可なり冷たいが、火鉢の火は過半白灰に化して、番茶の土瓶がその上に生温い湯氣を立てて居るのみであつた。

「白井さん、能く柔順に留守番して被在したわね。」

格子戸をがらりと開けて、びしやりツと閉めて、少し小自強體さうにして入つて来たお喜多は、コートも脱がずに突然と逸郎の机——實は一閑張の食卓——の側へ斜かけに坐つた。勿論右の足の甲は二寸ばかりも疊へはみ出して、身體を心持くの字形に逸郎の方へ寄せ掛けたさうに爲て居た。

「おツ、意外に早かつたね。首尾は何うだつたね。」

逸郎は氣遣はしさうにペンを差措いて、近眼鏡越しに振返つた。

「首尾も何も滅茶々々よ、私、もう大森くんだりまで行くのは懲々だわ。」

と、お喜多は斯う言ひながら、銀杏返しの根元がゆるむかと思はるゝばかり烈しく二三遍頭を左右に打掉るのであつた。

「何うしたえ、到頭玉枝とは顔を合はさすにかえ？」

「本統に莫迦々々しツちやありや爲ないわ。つべこべと饒舌る年増の女中が出たり入つたりした揚句に「奥様は俄かに御腹痛だからお斷り申します」と、

是なんですもの、私、随分腹が立つてよ。」

「は、はあ、矢張急病に托けやがつたのか？」

と、逸郎は左もあるべしと様に小腕を組み合はして、例の眞黒けに燻ぶつた天井を視上げた。

「然し、手紙は置いて来たらうね。」

「そりや當然のこツてすわ。私だつて萬更子供のお使ひぢやありや爲ませんもの。」

「然うかえ、手紙さへ置いて来りや此方の目的は幾分達し得られたと云ふもんだよ。まあ一週間の猶豫が與へてある譯なんだから、その期間丈は柔順しく待つより外はないさ。」

「私、もう眞平よ、一週間の談判には郎君自身で出てらッしやいよ。」
お喜多はよくく、大森行の失敗を懲りぬいたらしい言ひ分であつた。

「そりや不可よ。お喜多さん僕は兎にも角にも表面上手を切つた事になつてんだから、今更僕自身で出馬するのは、餘りに矛盾し過ぎると云ふもんだよ。」

「だって郎君、女だてらに豈夫御他人の家へ暴れ込むと云ふ譯にもゆかないし柔和しく出れば門前拂ひに極つてますわ、それよりか白井さん、私、お腹が空いて仕方がありませんから一杯飲みながらお話しやうぢやありませんか。」と、お喜多は物欲しさうな眼に逸郎が机代りに爲て居る食卓を眺めた。

二十五

「可からう、僕も實は咽喉がぐびぐびするのを泳へて居たんだそれに、此の間から荷厄介に爲て居た短篇も漸く今夜はデツち上げて了つた所だから……。」
「まあ、そりや可う御座んしたわね。」

と、お喜多は脱ぎ捨てたコートを些と袖疊みにして片隅に押遣りながら、
「それでもね郎君、玉枝さんが今時分彼の手紙を披いて見て、嘸喫驚してるこッてせうね」

「良心のある女なら、多少喫驚せずには居られまいよ。加之に記念の刃物までも入れて遣つたんだからね。」

と、逸郎は幾分會心の笑みを浮べた。

「私、出来る事なら玉枝さんが彼の手紙を披いて、彼の剃刀を手先に觸れた時の顔色が見たかつたんだけれども、門前拂ひとおいでなすつたんで、本統に惜い事したと思つてよ。」

「然うぢやないよ。門前拂ひを喰はされたのが、反つてお喜多さんの大僥倖と云ふもんだ。」

「何故ッ？」

と、お喜多は手近の鼠不入から小皿や徳利を取出しながら聞き答めた。
 『何故ツて云ふ事もないが、玉枝と云ふ女も時に依ると、なか／＼強烈な性情の女だから、彼の剃刀でもつて反対にお喜多さんに斬付けたかも知れや爲ないよ。』

「莫迦らしい。私、玉枝さんなんか斬付けられる理由がないぢやありませんか。』

『そりや元より理窟づくめぢや行かんさ。早い話がお喜多さんと僕とが今日の関係を結ぶに至つた原因だからとて、決して理窟や秩序的で斯うなつたものぢやなからう。何にせよ、僕は彼女の女を苦める丈け苦めてやつて、そして最後に自分の血を分けた子供を此方へ取戻してやればそれで、萬事の目的が足るんだ。』

何様、逸郎がお喜多を遙々と大森まで使者にやつた第一理由と云ふのは、逸

郎と玉枝との仲に出来た子供の在所が知りたい爲なのであつた。それには言ふまでもなく、玉枝が現在良家の生娘として白々しくも善七郎の許に嫁入りして居るのが、怎麼にも癪に障つて、忌々しくてならぬのと、眞の逸郎の心底から言へば、子までなしたる玉枝に飽迄まだ愛の執着——戀の未練が残つて居るからの事であつた。勿論お喜多にはまだ其處まで明さないにしても、子供の在所が分りさへ爲たらば、それをお喜多の手許へ引取らせて、育て、見たいと云ふ希望も十二分に存して居たので、此の希望が不思議にもお喜多としつくり一致したのであつた。そして、お喜多の携さへて行つた手紙の奥には、一挺の剃刀が封じ込められてあつたのである。其は去年逸郎と玉枝とが手を切るべく餘儀なくせられた當時、寧ろ心中して果てやうかとの相談を爲た事があつた。古河の在の鑛毒臭い渡良瀬堤の月に立つて、二人はしみじみと人生の果敢なさを泣き盡した揚句、既でのごとに二人の紅き血が剃刀の刃に塗られやうと爲たので

あるが、幸か不幸か追手の者に発見せられて、女は母親の手に奪はれ、男は東京へ連れ歸されたのであつた。その悲惨なる思ひ出の種の剃刀をば逸郎は故意に手紙へ巻き封じて、玉枝への面當に送り返したのである。

要するに逸郎は、お喜多を道具に使つて、飽まで玉枝を精神的に苦しめて、らうと云ふのがその目的なのであつた。

二十六

「然うだ、「白々しき女」と極めやう。」

逸郎はお喜多の爛を付けて出した九谷焼の徳利を引寄せて手酌しながら、突如として叫んだ。

「何です白井さん、「白々しき女」ツて云ふのは？」

お喜多はヒステリーの眼を鳩のやうに圓くした。

「なに、今書き上げた小説の標題だよ。相應しい題がないので困つてた所なんだ。」

「然う、それなら可いけども、白井さん、又郎君は「白々しき女」なんて、私の事でも材料に使ひや爲なくて？」

「なあに、和女の事ぢやないよ。」

逸郎はにたりと氣味わるく笑ひながら答へた。

「必定然うに違ひないんだわ。可い加減にお爲なさいよ。他を散々腹玩弄物に爲た上に、小説の材料にまで使はれりや世話なしだわ。可くてよ。」

お喜多は白粉の硬ばつたやうな顔をしやくらせて少しくつんと爲ながら自分の猪口へ自分で酌した。

「大丈夫だよ、安心しといで、正直に言へば玉枝の畜生を題材に爲てやつたのさ。愈來月の雑誌に掲載されたら關ふ事がないから、玉枝の良人の許へ一冊

送つてやらうと思つてるんだ。』

『そりや可哀さうだわ、玉枝さんが。直に離縁されて了ふぢやありませんか。』

『彼様な美人の假面を被つた悪魔は苦める丈苦めてやらなきや腹が癒えない。』

その方が第一良人になつて居る人にも將來の幸福と云ふものだらうぢやないか。』

白井は一體に男として神経過敏の性質である上に、疲れた腸へ熱い酒が沁込んで来るに連れて益々神氣が亢奮して来るばかりであつた。

『随分だわね。男ツて云ふ者は、誰でもそんなに執念深いもの……？』

『はッは、は、そりや僕ばかりかも知れないね。お喜多さんなんかは一體先の御亭主に對して何とも思つて居ないと云ふのが可笑いぢやないか、僕がお喜多さんなら、疾の昔に對手の女を呪ひ殺してやるのに。』

『煽動ツこなしよ。どうせ此方を見捨てるやうな薄情男に何時までこびり付

いて居たつて、面白くも可笑しくもないぢやありませんか？それよりか私は今の……。』

と、お喜多は半分言ひかけた語を酒と一緒に咽喉へ嚙み下して、

『ね。白井さん、郎君がそれ程に思ひ込んでらつしやる玉枝さんの事を悉皆忘れて下さいとは云ひませんから、私は私で何時までも見捨てずに頂戴ね。』

『そりや云ふまでもない事だよ。現に玉枝の奴が子供の在所さへ明して呉れたら、その子を此方へ引取つて、和女と一緒に育てやうと思つてゐる位なんだもの。』

『嬉しい。白井さん、屹度その語を忘れずに居て頂戴よ。』

新富町の夜は更けて、何處やらの方角からか二ツ鐘の遠音が心細く響いた。

逸郎は酔ひさへすれば、必ずぐうぐうと高聲で寝て了ふ癖があつた。そして真夜中であらうが、黎明であらうが、醒めさへすれば直に飛び起きて、懊惱煩悶する癖があつた。それが玉枝と引裂かれ、子供を撈ぎ取られてから後の逸郎は最も著しく最も烈しく現れた所の悪習慣であつた。

お喜多と二人で機嫌好く酒を酌み交して、好い心地に酔つて寢床に入つたのは、彼是十二時近くであつたが、餘り高價でない下卑た白粉の匂ひにぶんと鼻を衝かれて、逸郎は例に違はず不圖眼覺めた。柱時計を見ると、もう三時半であつた。すう／＼と夜具の襟から吹き込む風は可なり冷かであつた。

『おゝ寒む！玉枝の奴は一體今夜あたり甚麼夢を見てやがるだらう。』
傍に寝て居る女の耳には聞えないほどの低い聲で、逸郎は斯う呟きながら忍びやかに起き直つたのであつた。

女はそれを知つてか知らずには分らないが、寢返りも爲すにすや／＼と夢

路を辿つて居た。

『今夜はもう酒の残りはないかも知れない。』

逸郎は窃と脱け出して、臺所へ出掛けた。二三遍五合徳利をゆすぶつて見たが餘瀝の音さへもなかつた。

『火の氣はなし仕方はありや爲ない。』

と、逸郎は詮方なしに元の位置へ引戻つて、空しく兩腕を拱きながら忌々しさうに女の寝顔を覗いた。

みり／＼と消魂しい響きが爲たかと思ふと、ぶる／＼と貸家普請の戸障子が俄かに震ひ出して、稍暫時その震動が已みさうになかつた。天井にぶら下つて居る電球も又同じやうに顛へた。

『地震！地震だツ。』

と、逸郎は我知らず叫んだ。その聲に連れて女はきやツと云ひさま多羅しな

い姿で躍り上つた。

「お喜多さん、驚く事はない。軽微な地震が揺つたんだよ。」

「……まあ地震なんですか。私、又火事でも起つたのか知らと思つてよ。」

「御覧よ。彼の通りまだ電球が顛へてるぢやないか。」

「あら、本統ね。可なり酷かつたと見えますわね。屹度玉枝さんの一念が私達二人を駭かしに來たんですわ。」

「冗談ぢやない。此方の一念が彼方を驚かしに行くのなら聞えてるが、彼方から逆襲を受ける道理がないぢやないか。」

と、逸郎は軽い苦笑を漏らして、又暫時は無言に返つたが、地震の鎮まつた後の静かさと寂しさとは、今までよりはより一層深く彼の頭腦に喰ひ入つたのであつた。

「苦めてやりたい。王枝の悪魔を油地獄の責苦に遇はしてやりたい。」

ともすると、逸郎の心に浮び來るものは是であつた。

二十八

善七郎の特別庇蔭に依つて、製絨會社の庶務員に雇はれ、それと同時に通勤の便宜上から大森の不入斗へ移轉して來た久永夫婦は、揃ひも揃つて正直一途の貧乏性であつた。長い間本所の片隅に浪人住居して來た辛苦の昨日を思ふと不充分ながらも家賃や米代に困るやうな事はないし、酒は一滴も口に爲る事を嫌ひな質であるから、兎も角もして夫婦の糊口に例の異體の分らぬ預り兒を守り育てるには事缺かずに濟んだのであつた。

それに宗吉は、再び浪人の惨況さを繰返したくないと思ふ一念から、會社の方の勤め態も此の上なしに謹嚴であつたので、重役間や同僚間の評判も至つて順潮であつた。

妻のお綱も良人が日暮方に會社から歸つて来て、夕餉の膳に向ひながら、會社の人の噂話や、仕事の複雑な事や、西洋人が毛織物の注文に來た話など物珍らしさうに話すのを聞いては、ほく／＼と喜びの笑を漾はして居た。

「何時も／＼同じ事を繰返すやうだが、藤本さんが目を懸けて下さるんで何より難有いよ。夫婦の息のある間は眞個藤本さんの御恩を忘れちや濟まない。」睦しい夫婦が對座談の終りには、判で捺したやうに此の一句が附加へられたのである。と、お綱も屹度手を合せるやうに爲ながら、

「眞個ですわね。私なんか夜中に眼が覺めてさへ阿彌陀様より水天宮様より藤本さんが難有いと思つて心でお禮を申して居るんですの。本統に一家三人の命を助けて下さつたと同一ですもの。」

と、世辭からでなく合樞を打つのが例あつた。

今宵しも四疊半の茶の間で、いたいけな逸郎を對手に、這麼話が繰返された

後、宗吉は不圖忘れきつて居た或る事を思ひ出した調子で、

「おッ悉皆忘れて居たがね、土曜日の晩と云へば今夜だ。」

「ほ、ほ、ほ、今夜が土曜日で明日が日曜日に極つてるぢやありませんか。變な事被仰るのね。」

「所がだ、藤本さんの奥さんからね、是非土曜日の晩に和女に子供を伴れて遊びに來て呉れと云ふ御傳言が呉れ／＼もあつたんだよ。俺や悉皆失念して居たが……ね。」

と、宗吉は面目なげに頭を掻き出す。

「まあ呆れた。忘れる郎君も郎君だけれども……。」

と、お綱は迷惑さうに自分の身装を振返つて、
「そりや奥さまからの御傳言を頂くまでもなく、疾からお伺ひしたいとは思つてますけれども、男とは違つて、何ぼ何でも此の風ではね郎君。」

と、額に八の字。

「成程な。」

と、宗吉は愈々頭を餘計に掻きつゝ、

「垢染みた双子の半纏に脇のはみ出してるメリンスの帯ちや餘り酷いね。」

と、例の臉をしょぼつかせた。

「ほら、御覽なさいまし。何ぼ郎君だつて、此の身装ちや無理に行けどは言はれないでせう。」

宗吉は唇を縫はれたやうに熱と黙つて、唯まじくと妻の顔を視て居た。

二十九

「ですからね郎君、此の月の月給をお貰ひになつたら、何を儲措いても、上ツ張丈でも一枚買つて下さらなくちや、本統に仕様がありや爲ませんわ。」

と、お綱は良人の凹み切つた顔付を見て取つて、茲ぞとばかり切込む。

「そりや大きに然うだがね。」

と、宗吉は澁々ながら下を向いて、

「そりや然うだけれども和女、質屋に入つてる奴を請け出した方が安上りだらう。」

「だつて郎君、半年もその餘も利足を入れた事がないんですもの。反つて高く付く位のもんだわ。」

「弱ツちまふな本統に……。」

と、宗吉は又暫時口を尖らせたが、

「ねえお綱、そんな事は兎に角月給を貰つてからの問題だよ。差し當り今夜は何うあつても和女が子供を伴れて、藤本さんへお伺ひ爲なくちや、俺の義理が濟まん事になつてるんだ。どうせ此方の貧乏は奥さんだつて承知しきつて

被^ひ在^らるんだから、少しは體裁^{ていざい}がわるくつたつて關^{かま}ひや爲^なないよ。」

「郎君^{あな}が關^{かま}はなくなつて、私は女^{をんな}なんですもの。」

「和女^{あまへ}が女^{をんな}で、俺^{おれ}が男^{をとこ}さ。そりや昔^{むかし}から分^{わか}つてる話^{はなし}だ。」

「だから郎君^{あな}、こんな身装^{みなり}で初^{はじ}めてのお宅^{たく}へなんか伺^{かたが}はれないと云^いふんですよ。」

「それが和女^{あまへ}の氣^きが小^{ちひ}さ過^すぎると云^いふもんだよ。それにねお綱^{つな}、藤本^{ふじもと}の奥^{おく}様^{さま}と云^いふ方は、大變^{だいへん}子供^{こども}が好^すきらしいんだ。和女^{あまへ}に是非^{ぜひ}遊^{あそ}びに來^きて呉^くれと被^ひ在^らるのも、一ツは此^この逸郎^{いつらう}が見^みたいからの爲^{ため}めらしいんだよ。後生^{ごせう}だから和女^{あまへ}逸郎^{いつらう}を伴^{とも}れて一寸^{ちよつと}顔^{かほ}丈^{だけ}を出^だして來^きてお呉^くれ。」

宗吉^{そうきち}は泣^なかぬばかりにして、女房^{にようぼう}に頼^{たの}み入^いるのであつた。

「本統^{ほんとう}に……本統^{ほんとう}に私^{わたし}、極^{きま}りがわるくて困^まツちまふのね。」

お綱^{つな}は此^この上^{うへ}もなく辛^{つら}く羞^{はづか}しく思^{おも}つたのであるが、考^{かんが}へて見^みれば、それもこ

れも一家^{いけい}生活^{くわつ}の爲^{ため}である。先方^{せんぱう}で是非^{ぜひ}來^こいと云^いふ時^{とき}に行^いつて置^おかねば、一生涯^{じゆうがい}行^いく時^{とき}期^きがなくなつて了^{しま}ふかも知^しれぬと云^いふ虞^{おそ}れもあるので、到頭^{たうとう}不承^{ふじやう}々々^{々々}に起^たち上^あつた。それでも女^{をんな}の嗜^{たしな}みの髮^{かみ}丈^{だけ}を搔^かき直^なしたり、銘仙^{めいせん}の前垂^{まへだれ}の稍^{やこ}小淡白^{せうたんぱく}としたのを掛直^{かけなほ}したり爲^なしたのであつた。

「お綱^{つな}、逸坊^{いつぼう}にも涎掛^{よだれかけ}丈^{だけ}でも取換^{とりか}へさせて行^いくが可^いいよ。藤本^{ふじもと}さんは無論^{むろん}お留^{りゆう}守^すの事^{こと}は分^{わか}つてるんだけれども……。」

「知^しりませんよ。私^{わたし}……本統^{ほんとう}にこんな苦^{くる}い事^{こと}はありや爲^なない。」

と、お綱^{つな}はぶり／＼と爲^なながら、逸郎^{いつらう}を引抱^{ひらか}へて靴脱^{くつだ}へ降^かりかけたが、

「まあ、履物^{はきもの}だつて、こんなバツテラ見^みたよなんだしさ。」

と、獨^{ひと}りでぶつくさ。宗吉^{そうきち}は然^さうした妻^{つま}のぶつくさを聞^きく毎^{ごと}に、胸^{むね}を磐石^{はんじやく}で壓迫^{おしつ}けられる様な苦痛^{くつう}さを感じ^{かん}せぬ譯^{わけ}にゆかなかつたのである。そして一面^{いっぺん}には必^{かなら}ず自^じ分の無意氣^{むいけ}地^ぢを

腑甲斐なく思ふの餘り、寧ろ妻など云ふ者は叩き出して、一生獨身で暮
 したいやうな氣も爲たのであつた。

「女としちや無理はないが、久し振で廿五圓の月給に有付いたのは、俺に取つ
 ちや無上の出世だのに、ともすると、彼様無法ばかり吐しやがる。」
 と、お綱の出て行つた後で、宗吉は獨りで口惜がつて居るのであつた。

三十

善七郎は今日の土曜日から日曜へかけて、會社の所用の爲めに名古屋まで出
 張したのであつた。玉枝はその留守を幸ひと、久永に傳言して、久永の妻のお
 綱に遊びに来て貰つたのである。お綱に遇つて見たいのも勿論希望の一つであ
 つたかも知れぬが、實は久々で子供の顔がゆつくりと見たくなつたからであ
 つた。

態々東京の風月からお菓子を取寄せたり、二歳位の子供に相應しい玩具を買
 つたりして、お綱が子供を連れて來るのを今かくと願を長く爲て居た。

「奥様、お待ちかねのお客様が……。」

と、定やが大急ぎで走つて來たので、玉枝は飛立つばかりに嬉しく思つた。

「まあ然う。此方の室でも關はないやうなもんだけれども、初めて入つしたん
 だから、奥の方へお通しして頂戴。」

斯う言つてる間にもうお綱は、子供を泣かせながら定やの後に跟いて入つて
 來たのであつた。

「こんな身装を爲て居りますから、何卒お臺所の方でも……。」

と、お綱は身を卑下するばかりでなく、心から身装のみそぼらしいのを恥し
 く思つて、暗い方へくと尻込みして居た。そして初めて遇つた玉枝の初々し
 い濃艶かな容貌を視ぬやうに視上げた。何様良人の話以上に美人の奥様である

と情々に感じた。

女同士の初対面の挨拶は可なり管々しいものであつたが、玉枝はそんな事よりも先に、子供を自分の膝の上に抱き寄せて見たくて堪らなかつたのである。

『何うかあのお堅い御挨拶はお廢し遊ばしてお樂にお在下さい。本統に可愛いお子で御座いますことね。』

と、兩手を差延べて「おいで〜」を爲て見せると、逸郎は不思議にも露ほどの人見知りも爲ないで、泳ぐやうに匍匐ひ乍ら玉枝の膝へ取付く。

『ほ、ほ、先達て宿がお湯の歸掛にお借りして來た時に比べると、又一層丸々とお肥りになりましたわね。』

と、玉枝は我を忘るゝばかりに緊乎と抱き上げて、幾度かそのふつくりとした頬に接吻した。

『奥様、私など、違つてまだお若くてお在遊ばしますのに、能くまあこんな穢

らしい子供を……。』

と、お綱は寧ろ呆れて見て居た。

『おほ、ほ、ほ、一歳二歳の嬰兒に奇麗も穢いもあるもんぢや御座いませんわ。私、心底から小兒が好きなんで御座いますもの。』

と、玉枝は執拗い程子供をいびり廻して居たが、可愛さの度がよく〜高潮に達した加減でもあらうか？何の氣なしに自分の胸先を擴げて、葩の如き子供の唇を左の乳房へ宛行つて見た。

と、お綱も亦何の氣なしに其状態を眺めつゝあつたが、不圖玉枝の乳首の黒み鹽梅が尋常一通でないのに氣付いて、はつと思はず胸を轟かした。産に經驗のある而も苦勞性のお綱は、一目に玉枝の身邊に蠕まつて居る黒い影を認め得たのであつた。

玉枝は殆ど夢心地であつた。逸郎が眞綿よりも柔かい掌で、片方の乳房をひねくりながら、太宰の美味にでも有付いた様にチュ〜と乳を吸つて居るその無心なる顔付を眺めて、玉枝は眞個葡萄酒にでも酔つた様に恍惚として居るのであつたが、暫時すると、流石に自分のはしたない舉動に氣付いたと見えて、慌だしくも逸郎を乳房から引放して、そこ〜に衣服の襟を掻き合せた。そして思ひ出したやうに、

「此のお子の名はたしか逸郎ツて被仰るんでしたね？」
と、てれ隠しの了簡で言ひ補したのであつた。

『はい、名なしの儘で預りましたもんですから、良人が姓名判断とやらの先生に御相談を致したとやら申して、逸郎と命けたので御座います。』

「……………逸郎ツて、男らしい好いお名で御座いますわね、本統に……………」
と、玉枝は又逸郎と云ふ名前に就いても、尋常ならぬ追憶の念に驅られざるを得ないのであつた。

後は子供を中心にして、初對面の二人が一見舊知の如き親みを以て、茶を飲みながら何や彼や世間話に時を移すのであつたが、逸郎はもうその間に睡氣が催して來たらしく、玉枝の膝に抱かれた儘ですやく〜と樂しき眠りに落ちて了つた。

「まあ、迂濶々々と長座を致しましたが、もう何時で御座いませう？」
「あら、何時だつて、御遠慮には及びませんですよ。遅くなつたら、書生に送らせて差上げますから……………」
『それでも又、初めて参上りましたお宅で、遠慮を知らぬ女だなど、良人から叱られますかも知れません。』

お綱はそろ／＼歸り仕度を爲る了簡で、逸郎を玉枝の膝から取返さうと爲ると、玉枝は遮るやうにその手を抑へて、

『そんな事被仰らずに、いま三十分で可う御座いますから、お話下さいまし。それにね、甚だ失禮ですけれども。私、貴女に御進上致したい物が御座いますの。』

『何う致しまして……良人が旦那様のお世話を頂きます丈でもう十分で御座いますから。』

『いえ、お腹立ちや困りますけれどもね、あゝ、久永の奥さん、私が眞の二二遍手を通した丈ですが、追々時候にもなつて來ますから、わるい裕を一枚と、それから雨降にでもお引掛けになるやうな古コートを一枚差上たいのです。貴女、貰つて下さいませうか。』

玉枝は勿論久永夫妻の貧乏を憐れむの心からでもあらうが、誠は自分の子で

ありながら、自分の子と言はれぬ逸郎の爲めに、何事も好かれかしと冀ふ一念から、特に斯うしてお綱の歡心を買はうとは努むるのであつた。

『途方もない、そんなお立派な物を頂戴致す筈は御座いません。』

『なに、立派でも何でもありませんよ。是からは又いろ／＼と私の方でもお世話を頂いたり、御相談を願つたり爲る事が澤山に御座いますから。』

と、玉枝は既や定やを呼び寄せて、箆笥の抽斗から件の二品を取らせた。お綱は生れて始めてこんな嬉しい目にも遇ふのであつたが、併しながら一面には又、云ひ知れぬ氣味わるさを覺えぬでもなかつた。彼女は又しても玉枝の乳首の尋常ならぬ點に就いて、何等かの疑心を挾まずには居られぬのであつた。

「郎君、今歸りましてよ。」

お綱は眠つたまゝの逸郎を肌はだに抱かかへて、岩雄いしおに送おくられながら歸かへつて來たのであつた。

「随分ゆつくりだつたね。」

留守番るすばんの退屈たいくつ凌しのぎに手枕てまくらを爲しながら古雜誌ふるざっしを拾ひろひ讀よみして居た宗吉そうきちは、けたるさうな聲こゑで、斯かう言いつた儘まま、お綱つなの方ほうへは眼めを轉うつさうとも爲せずに居た。

「ちよつと郎君あな、お禮れいを被仰おつしやうつて下さいよ。このお寒さむいのに態々わざ々彼方あちらの書生しよせいさんが送おくつて下くだすつたんぢやありませんか。」

「なに、書生しよせいさんが送おくつて來て下くだすつた？だから俺おれが御迷ごめい惑わくを掛かけないやうに氣きを付つけなさいと言いつたんぢやないか。」

と、宗吉そうきちは飛とび上あるやうに起おき直なつて、戸口とぐちの所ところから額ひたいを撫なでく、岩雄いしおに對たいして禮れいの百曼陀羅まんだらを並ならべた。岩雄いしおは「何どうしまして」と言いつたぎり、抱かへて

來た風呂敷包ふろしきづつみを内うちへづしんと投なり込こんで、さつさと行いつて了しまつた。

「おやツ、こんな風呂敷包ふろしきづつみを置おいてらしつたせ。お綱つな、こりや一體たい何なんだえ？」

「何なんだつて彼かだつて、郎君あなまの開あけて御覽ごらんなさい。」

お綱つなは嬉うれしさに堪たへぬやうな聲こゑで、逸郎いつらうを隅すみツこの方ほうに寢ねせ付つけながら言いつた。

「開あけて見みても可いいのかえ。」

と、宗吉そうきちは少々せうせう氣味きみわるさうな眼付めつきで、風呂敷ふろしきの結むすび目めを解ほいた。中なかから現あらはれたのは、華奢はなな米琉よねりうの女をんな裕ゆと薄鼠色うすねずみいろの女をんなコートとで、その他ほかに子こ供どもの玩あそ弄物もと西洋菓子せいやうかしとが澤山たくさんに紙かみに包つつんで取とり添そへてある。

「非常ひじょうに立派りっぱな物ものばかりだね。何どうしたと云いふんだ、こりや一體たい何なん？」

「何なんうしたんでもない、奥様おくさまから頂いただいて來たのよ。」

「……………頂いただいて來た？初はめて伺うかつて初はめてお目めに蒐かつた奥様おくさまから、こんな

立派な物を澤山頂いて来ると云ふのは、餘り和女が圖々し過ぎると云ふもんだよ。奥様の思召しは思召しとして、深く感謝するけれども、後で藤本さんのお耳へでも入ると、反つて將來の不爲だ。これはお綱、折角だけれどもお返し申すが本統だよ。」

「そりや郎君の被仰るまでもなく、私も大變に御辭退したんだけれども、何うしても奥様がお肯きなさらないんです。そして、終ひには私見たよな者のお古だからお氣に召さないんですか……つて、こんな事まで被仰るんですもの。私、本統に弱りきつて了つたんですわ。」

「ふーむ、然うか。それにしても餘まり品物が上等過ぎるやうだな。俺や何となく變で仕方がない。」

と、宗吉は又しても臉を急がしくしよばつかせ始めて、女房の顔と風呂敷の品物とを比較研究でも爲るやうに見比べ〜して居た。

漸く逸郎を寢せ付けて来たお綱は、衣服の前を掻き合はせながら、良人の傍らへべたんこに坐つて、

「郎君、變と被仰れば、私も非常に變な事があるんですの！」

「非常に變などは………？」

「眞個非常に變な事なんですの！藤本さんの奥様は彼りや彼のやうに初々しい美しくいお顔を爲てらッしやるけれども、生娘でも何でも有りや爲ませんわね。」

お綱は大なる確信のあるらしい強い調子で、判然と言ひきつたのであつた。

三十三

「なにッ、そ、そ、そりや和女、何を證據にそんな事言ふんだ。」
宗吉のしよば〜と爲た眼は、仇の顔でも見直す様に驚愕に光つた。

「そりや、確な證據があるから言ふんですわ。不圖した事から私、奥様の乳房を拜見したんですがね、その格恰と云ひ、乳首の黝んで居る工合は、何うしたッて、嬰兒の一人か二人は産み落した方としか思はれませんの。いえ、確かに然うに違ひないんですの。」

と、お綱は聲に力を籠めて繰返し、言ふのであつた。そしてその後から直に、

「それにね郎君」

と、一倍怪訝に充ちたる眼を睜つて、隅に寝て居る逸郎の方を顧り、

「それにね郎君、私、もう一ツ變でならない事は、この子の面貌と彼の奥様の面貌とが、何處ともなしに似通つて居るやうな氣がしてならないんですわ。郎君にはそんな感じは少しも有りませんか？」

「待てよー」

と、宗吉は重さうな頭を右に左に二三遍掉り動かしたが、

「うむ、和女から然う言はれて見りや、眼と眼の間から、口元の邊などが不思議に似通つて居るやうな氣もするね。けれども豈矢、この子が彼の奥様の……と云ふ譯はなからう。矢張そりや他人の空似と云ふ奴だよ。」

「そりやまあ、私だつて、豈夫とは思つてますけれどもね、郎君、初めて伺つた私に、こんな種々な物を下さると云ふのも、考へて見りや少しは變手古な所もあるやうだし、故意に旦那様のお留守の時を計つて、私に逸郎を連れて遊びに來いと言つてお寄越になるのも、邪推かも知れませんが、餘程可笑な譯で御座いますね。」

宗吉は自分の正直な丈に、他を疑ふなど云ふ事は大嫌ひの質であるが、其處へ行くと同じ正直者でも、お綱は女丈に、萬事の觀察力が數倍緻密くて、そして鋭敏なのであつた。

「成程、言はれて見れば、段々妙な點がないでもないね。」

「ね、郎君だつて、考へて見たら道理とお思ひになる點があるでせう。それでね郎君、若しやひよつとして、萬々一にも、この子が彼の奥様の秘し子と云ふ事が分つたと爲たらば……いえ、假りにですよ……分つたと爲たらば、郎君、この子を何うなさるお了簡？」

「そりや、その時の分り工合に依つたものさ。今から何方とも豫言する譯にはゆかんよ。」

「私、何だか知らないけれども、何うしてもこの逸郎は、彼の奥様の産みの子のやうな氣が爲て仕方ありませんから、思ひ切て極内々にお聞き爲て見やうかとも思ふんですがね……。」

宗吉は黙つて、口を噤んで考へ込んだなりであつたが、

「それに爲ても、いま暫時時機を見る必要があるよ。迂濶に此方からそんな事

言ひ出した所で、彼方が飽まで隠蔽す氣ならば、「知らぬ」と一言の下に刎ね付けられて了ふまでの事だからね。それよりは俺は藤本さんに對して頗る同情に堪へないんだ。」

「何がです？」

「何がつて和女、藤本さんは恐く清淨無垢の生娘として、奥様にお貰ひやつたものに違ひなからう。それが和女……果して和女の言ふ通りと爲たらば……恩人の奥様を蔑むではないが、下腹に毛のない狐と云つてと然るべきぢやないか。俺が若し藤本さんと同格の人間だつたら、是からでも直に忠告を爲てやりたく思ふんだが……。」

と、宗吉の同情心は一轉して、恩人善七郎の上に傾いて來たのであつた。

「然う被仰れば、それも然うですね。」

「知らぬ中は兎に角、そんな事が段々事實に近くなつて來るものとすれば、俺

の性質として、何うしても素知らぬ顔をして、朝から晩まで藤本さんの側に立ち働いてる事が能なくなつて了ふんだが、何にしても困つた事件が持上つて来たもんだね。』

と、宗吉は心から當惑の溜息を吐き流すのであつた。

三十四

「玉枝さんが……玉枝さんが……。」

と、云ふ話聲が耳に入つたので、善七郎は不圖汽車中に假睡の夢を破られたのであつた。彼は今、名古屋から所用を果しての歸途なのであるが、御殿場の邊から空氣枕を頸首に宛行つた儘ぐつすりとい息に箱根の隧道を通り越して、山北も松田も夢中に過ぎて了つた。だから今、自分の汽車が東海道の何の邊を駛つて居るのかさへ自分には判断しかねた。

「厭な夢だ……然し、夢で幸福だつたが……。」

と、善七郎は、睡眼を擦りながら、車窓の硝子越しに外を眺めた。足柄山の邊に細い鎌のやうな月が入りかけて居るのを見てから、漸く箱根を越して了つたのだなど氣付いた。洋袂から時計を出して見ると、午前四時頃であつた。

「あゝ、厭な夢を見るもんだ。」

と、善七郎は再び口の底に繰返して、氣遣はしさうに自分の身邊を眺めた。が、次手に睡を轉じて、自分の斜向ふを見やると、何時何處の停車場から乗込んだものか知らぬが、カーキ色の軍服を被た壯い陸軍の尉官らしい二人の男が無禮講式に體を崩して、オツカアの角塚を傾けながら、盛んに氣焰を揚げて居る最中であつた。他にも二三人の乗客はあつたが、大抵は皆長途の旅に疲れて、手荷物を枕に突膺して居た。

善七郎は必要もないのに、又時計を引張り出して眺めたりして居た。玉枝へ

の土産であらう、名古屋名物の漬物樽だの、静岡名物の鯛飯の折だのが四ツ五ツ一束に引括つて、膝の側に投げ出してあつた。

「玉枝さんの噂はもう止さうよ。君だつて僕だつて、今日となつてはもうお互に戀の落伍者ぢやからね。併し、君の今話した所が事實と爲りや寧ろお互の將來に幸福であつたんぢやね。は、は、は。」

鼻の低い眼の玉のくりツとした方の尉官は、壓退るやうな調子で笑ひながら言つた。

「幸福とも大幸福ぢやよ。そんな不品行な秘し子まであるやうな表面丈令嬢のヴェールを被つて居くさる白々しい女を生娘の了簡かなんかで妻に娶つて見給へ、それこそお互に戦争に出て弾丸に當つたからつて死に切れたものぢやありませんよ。」

比較的色彩の白い丈の高い方の尉官は、聲に力を籠めて答へた。

「怎麼にも然うちやね。然うちやけれど君、彼の嚴格なる村田大佐殿の娘にそんな不都合なのが出來やうとは誰も思はんからね。」

「大佐殿が怎麼に嚴格でも、大佐殿自身が東京の自邸に居らるゝ事は殆どありやせんからね。恐らく大佐殿は何にも知らずに御座るに違ひないんぢや。それを思ふと僕は、大佐殿に同情するよ。」

「無論大佐殿にも同情せにやならんが、僕はより一層彼の女を生娘と信じて妻に娶つた……。」

と、云ひかけて鼻の低い尉官は、誰も能く爲るやうにじろりと善七郎の顔に一瞥を呉れたが、直についで、

「僕はより一層彼の女を娶つた男の境遇に同情するね。」

「あッは、は、お互ひもいま既での事に同情される側になりかけたんぢやないか。」

「は、は、は、大きに然うぢや。」

壯い二人の尉官は、高い聲を揃へて吹出すやうに笑つた。

あはれ、この時の善七郎の顔色と來ては、實に何とも彼とも形谷の出來得るものではなかつた。彼は既での事に腰楊の上へ卒倒せんばかりであつたが、無理に精神を押鎮めて、車内の徒歩運動を試み始めた。

三十五

「ぢやがね、下山君、お互ひに是でも青島攻圍軍の勇者ぢや。どんな窺窺たる美人でも貰つて貰へん事はなからう。」

「無論さ長谷野君、愈歐洲出兵でも實現される場合があつたら、君などは巴里第一等の美人に見染められるかも知れんね。はッ、は、は。」

「歐洲出兵と云ひや、その方よりか支那問題の方が先らしいせ。」

「然うぢや。然うしたら支那美人の足の小さいんでも關ひやせんぢやないか。歩行が不自由ぢやから反つて玉枝さんのやうな浮氣を爲んで安心と云ふもんぢやよ。」

二人の尉官は、善七郎の氣も知らないで、オツカアの回るが儘に取止めもない女話に耽つて居るのであつた。

善七郎は聞いて聞かぬ態を爲ながら、餌を探す野兎のやうに、只彼方此方と車室の中を歩き回つて居るのみであつたが、汽車は間斷なく駛つて國府津を過ぎ、大磯を過ぎ、茅ヶ崎を過ぎ、横須賀の分岐點たる大船の驛へ着くと同時に、二人の尉官は慌だしさうに身仕度を整へて、がちやがちやと帶劔を引摺りながら消ゆるが如く降りて了つたので、車中は俄かに火の消えたやうな淋しさに變つた。何方を見ても疲れたる駢の聲より外になかつた。

善七郎は滅多にない例であるが、此の時に限つて、正宗の二合塚を一本なら

す二本まで買ひ込んで、汽車の動き出さない中にもうその一本を七分目餘り喇叭式で平げて了つた。勿論それは氷のやうな冷酒の儘であつた。

『今の青年士官等の話も話だが、先刻の夢も實に……』

と、善七郎は長い酒臭い息を吐流して、不安極まつた眼に自分の膝を凝視めた。彼が汽車中で見た夢と云ふのは、妻の玉枝が自分の留守中に鋭利なる剃刀を以て、美事に咽喉笛を搔ツ切り、血に染つて突腑して居た。と、その傍らに二歳ばかりの男の兒が泣きながら取絶らうと爲て居る。で、その男の兒と云ふのが、久永夫婦の例の預り兒のやうでもあるし、それとは全然違つた兒のやうにも思へて、何方とも判断が付きかねるのであつたが、其處へ又一人の白粉を眞白に塗つた女が現はれて来て、泣き叫ぶその兒を無理に引攫んで行かうと爲た。すると、全く緋切れて居るらしく見受けた玉枝かひく／＼と起き返つて、むづとばかり白粉の女の頸髪を引攔んだ。白粉の女は振千切つて逃げやうとす

る。玉枝は逃さじとする。その時の双方の顔付と云つたら、宛然夜叉と鬼との争ひであつた。善七郎は見かねて双方の真中へ飛込まうと燥つたが、兩の脚が針金で縛り付けられたやうに立ち縮んで、何うする事も出来ない。あれ／＼と思つてる間に、二人の女は子供の手足と足を別々に引攔んで、二つに裂けよとばかり奪ひ合ふのであつた。あッ、子供の身體が二ツに裂けて了ふ、赦してやれ……と、我を忘れて聲を掛けやうと爲る途端「玉枝さんが……玉枝さんが」

と、云ふ壯い尉官等の話聲が耳に止つて、突然夢は破られたのであつた。それから引ついで、尉官と尉官との噂話が彼の通りなのであつた。

善七郎は自分ながら氣が狂はずに居るのが不思議な位であつた。いや、實は既に半分以上狂ひかけて居るやうな氣も爲たのであつた。彼は鶴見へ来る迄に正宗を二本とも呷つて了つた。

三十六

鶴見から大森までは、僅か十六七分の帳場であるが、燥ちに燥つて居る善七郎は、その十六七分の時間さへも待ち遠しさに堪へぬのであつた。靴の裏でこつくと床を響かせたり、腰掛から起つて見たり坐つて見たり、首を掉つたり手を動かしたり、時計を出したり引込ましたり、平生の溫柔平靜なる善七郎は、全然全然別人の如き噪狂的態度であつた。顔と云はず眼と云はず、宛然櫓の火に映つて居る山賤のやうに眞赤で、そして險しく見られた。彼は今、亢奮の頂上に達して居るのであつた。

「不都合な女だ。打殺したつて飽き足りやせん。」

「大森々々」

と云ふ驛夫の叫びを聞くと同時に、彼は扉を開ける間も遅しと列車を飛び出

した。改札口を脱ると等しく、客待の車夫を備はうと思ひつゝ、黎明に近い停車場前の廣場を見回して居ると、突然彼の背後から、

「お歸り遊ばせ」

と、優しい聲で呼止める者があつた。

「誰だツ。」

と、善七郎は血走つた眼でその方を振り返つた。

「嗚お草臥れで被在いませう。」

と、小腰を屈めながら、差寄つて來たのは、誰でもない妻の玉枝であつた。定やもそはくしさうに爲て、その傍らに附添つて居たが、

「旦那様、お荷物は私が……。」

と、言ひながら、主人の手から靴やその他の小荷物を受取らうと爲た。

善七郎は何がなしにふるくつと顫えた。定やの語には耳をも假さない。喰

ひ入るやうな眼付で熟と執念く玉枝の顔を凝視めた。

「郎君、汽車中は随分お寒かつたで御座いますせう。」

と、玉枝は平生に變らぬ落着いた平和な初々しさで身を摺り寄せるやうに爲ながら、

「ね、郎君、お荷物は定やお持たせ遊ばしたら……。」

と、注意的に言つた。

けれども、善七郎は尙唇さへも動かさうとは爲なかつた。海から吹き上げて来る曉の風の冷たいのに不圖心付いて、定の方へ瞳を轉じかけたが、靴と小荷物とを投げ出すやうに地の上に卸して、

「何故、清助に俵を持って迎ひに寄越さんのか。」

と、初めて一語。

「清助はあの少し風邪を引いたとか申して、自分の宅へ歸つとりますので、私

と定やとで、お迎ひに上つたので御座います。」

「それなら仕方がない。」

と、善七郎は不精々々に先へ立つて歩き出したのであつた。

平素もならば、にこ〜とした恵比壽顔で、

「留守中に何事もなかつたかえ」

とか、

「わざわざ出迎えて呉れて氣の毒だ」

とか何だとか彼だとか、蒼蠅いほど優しい語を掛けて呉れる良人が、可なり激しく酒氣を帯びて居る上に、その語調と云ひ、顔色と云ひ、すべての素態が甚だ腑に落ちがたいので、玉枝と定やとは思はず眼と眼を見交はして、不審ながらに唇を歪めた。

善七郎は停車場から海岸の家へ到着するまで、玉枝にも定やにも只一語の口さへも利かずに、平生よりも一層足早にすたくと歩いた。そして門脇の潜りを入つて、玄關の靴脱へ飛び込むと同時に、どつかり上り框へ腰を卸した。おくればせに尾いて来た定やは、氣を利かして大急ぎに主人の靴を脱がせた。

「關はん打捨つとけ。」

斯う言つたきりで、善七郎は稍暫時内へ上らうとも爲ない。

「旦那様、御氣分でもおわるいのでは御座いませんか。」

と、定やは氣遣はしさの餘り恐るゝ訊いて見たのである。

「いや、別に……。」

と、善七郎は太儀さうに膝頭を叩きながら、初めて三日と二晩振の我が居間

へ入つたが、この時玉枝は既に内玄關の方から回つて、其處にちやんと待ちかまへて居たのであつた。

「この古狐奴が……！」

と、善七郎は、心私かに呟いたのである。然しながらまだ、面と向つて詰問の矢を放つ丈の勇氣はなかつた。それは曉の海風に吹かれて、酒の氣の大分消耗して居たからでもあつたが、この美しい、この優しい、この初々しい顔付をして、豈夫に乃公の眼を晦ますほどの大膽不敵な女ではなからうやうに思はれたのも、その一原因であつた。

「玉枝、今日一日は休養する了簡だから、九時頃になつたら、會社の方へ電話を掛けとくが可い。」

「畏まりました、で、郎君は朝御飯を召上りましたら、少しお寢み遊ばすんで御座いますか。」

「いや、寝むところの段ぢやない。乃公は別に非常な用事を控へとるんだ。」

「まあ、非常な御用と被仰いますのは？」

「疵持つ玉枝は、いや増しに気が氣でなかつた。」

「うむ、非常の用事があるんだ。大きく云へば、善七郎の一生の浮沈にも關するほどの大事件が起つたんだ。」

「えつ、郎君の一生の浮沈にも……？そりやまあ、何事なんで御座いませう。」

玉枝の胸は既や早鐘のやうに動悸ついて來た。持前の落着は顔の色と共に何處へか消失したのであつた。

「真に大事件なんだ、折角手に入つた金にも命にも換へがたない大切の名玉に思ひがけない瑕瑾が入つて居たので、その後始末を何とか付けにやならんのだ。」

と、善七郎は細い目を無理に剝いて、きらりと光らせながら言ひ放つた。膝

の上に握り固めた兩手の拳は、びり／＼と顫へを帯びて居る。

玉枝は苦い薬でも嘔み下すやうな顔して、熟と俯向いて了つた。

三十八

一體善七郎が玉枝に向つて、是だけ思ひ切つた事を言ひ出すには、餘程の大

奮發——大決心から來たので、是までも二三度は迂遠しな謎見たやうな事を言

ひかけて、内々玉枝の良心を氣引いて見た事もないではなかつたが、こんなに

激烈な、こんなに擗猛な態度を以て切り出したのは、恐らく今日が嚆矢なので

あつた。

當然の結果として、玉枝それ自身も亦最後の大決心を爲ねばならぬ命の瀬戸

際に立ち至つた。然し唯つた今、名古屋の旅行先から歸つたばかりの良人が、

後先もなく斯う云ふ事を言ひ出すには、其處は何等かの導火線となるべき有力

なる何物かかなければならぬのであるが、とてもその事にそれを知りたいと玉枝は思つた。

「……郎君、それは一體何う云ふ事なんで御座いませう。私には薩張郎君の被仰る事が解しかねますので、お返事の致しやうもないんで御座いますが……」

と、玉枝は稍暫時してから、幾分鹿爪らしい語調で聞き直つた。

「うむ、そりや然うだらう。」
と、善七郎は道理らしく唇を緊んで、又今更のやうに玉枝の白々しい顔付を輕侮的に見直したが、

「玉枝、も少し此方へお寄りッ。」

と、一喝！

「はい……。」

と、玉枝は二三寸小膝を蹠り進めた。

「何時ぞやも一遍乃公から和女に何か秘密はありはせんかと尋ねた事があつたが、今日は再びそれを繰返すのではないよ。乃公は思ひ切つて……真に思ひ切つて、和女に詰問せにやならんのだ。秘密がありはせんかと訊いた時には、乃公の方に多少の疑問が存しとつたからの事だが、今日の乃公は最早和女の胸中に大なる秘密が潜伏して居るものと断定しての上で詰責するんだ。いや、詰責のみではない審判せにやならんのだ。和女は能くも和女の兩親や媒灼人と結託して、此の善七郎を盲者に爲て呉れたね。」

茲に初めて破壊の幕は切つて落されたのであつた。
玉枝は故意に呆氣に取られたやうな顔付を爲て、怒りに熱したる良人の顔を視上げた。

「あの……私が兩親や媒灼入の者と結託して郎君を盲者に爲たと被仰いますのは……？」

「そ、そ、その語からが、既に此の上もまだ乃公を盲者に爲やうと努めたる證據なんだ。玉枝ッ……。」

と、善七郎は拳の背で既んでの事殴りかゝるかと思ふ程凄じい調子で、

「玉枝ッ、和女は和女の阿父さんの引立を受けて居る陸軍の中尉か少尉かで下山と云ふのと長谷野と云ふのを知つとるだらう。」

「下山と……長谷野、何方も能く存じとりますが、それが何うか致しましたので御座いますか。」

玉枝は的切り彼の青年文士の白井逸郎の事を言ひ出されるものと想像して、内心いたく怖氣を振つて居たのであるが、案外にも然うでなかつたので、是れは不思議なと思ふ中にも、幾分か又動悸の鎮まる點がないでもなかつた。

三十九

「いや、その二人の壯い士官が何うしたと云ふ譯ぢやないが、和女の記憶に存して居るか否かを訊いとかにやらん必要があるんだ。」

善七郎は斯う云つて、又妻の面色の如何に變りゆくかを見定むるやうに見て居た。

「そりや存じて居りますとも、二人共に書生の時分から宅へ遊びに来て居りました人達で御座いますもの。そして父は、私の兄と同じやうに可愛いがつて居りましたので御座いますから……。」

「然うか。それで少しは了解した事もあるんだが、和女はその何方かの細君に貰はれて行く話があつたらう？」

「ほ、ほ、ほ、そりやそんなお話の出た事も御座いました……やうで御座いますけれども、私は何うしても實業家の妻になりたいと云ふ理想を抱いて居りましたし、母もそれに越した事はないと申して居りましたので……。」

玉枝は特に善七郎の意を迎ふるやうな調子で口籠りながら答へた。一體玉枝は見た所よりも腹の超えた女であるから、良人に言ふ丈の事を云はせた後で、坐ろに自己の策戦を運らさうと云ふ了簡が十二分にあつたのであつた。

「だから、その壯い士官達の要求を弾ね付けて、乃公のやうな實業家の雛ツ子の許へ来たと言ふんだね。」

「……………」

玉枝は無言に首肯くやうに爲ながら、火鉢の縁を撫で廻した。

「然うなのかえ、玉枝。」

と、善七郎は重ねて念を押したが、

「和女、そりや詐言だらう？」

と、手強く言ひ足して、膝の上の拳をいやツと云ふほど自身の膝を叩いた。

「何うして私が詐言なんか申上げる譯はないでは御座いませんか。」

玉枝の聲は流石に狼狽の波動に顛へた。勿論眼の玉の光も變つた。

「詐言でない事があるもんか。和女にはその當時二人の壯い士官以上の大切な情夫があつて、然もその情夫との仲に罪惡の結晶物まで出来て居たのだ。玉枝、隠さずに潔く乃公の前で懺悔して了ひなさい。」

「まあ、思ひもかけない事を……一體何者が郎君に左様な讒言を申したのか知りませんが、ざ、ざ、……罪惡の結晶物なんて、そ、そ、それから第一私には意味が分りかねますで御座います。」

「ふむ、罪惡の結晶物が和女に分らんのか？それぢや和女は自分の罪惡を罪惡と心得て居らんのだらう。露骨に言へば、私生兒を和女は産み落して居るんだ。」

「誓つてそんな事は御座いません。郎君は何を證據にそんな事を被仰るので御座います。私の爲る事爲す事がお氣に召さないなら召さないで、小石川の母

をお呼びになつて、お引渡し下さればそれで宜しいでは御座いませんか。身に覚えもない罪科を敷へ立つて、私をお苦めになるとは、餘りに殘酷と云ふもので御座います。わ、わ、私、この口惜さは一生忘れや致しません。』

と、玉枝は今になつてから、初めて玉のやうな涙を滾し始めた。

四十

善七郎は女の涙ほど都合の好い時に出るものはないと、此の時情々腹で思つた。然し「證據呼はり」を爲れる段になつて來ると、汽車中の夢とそれから二人の若い尉官の話とより外にはないので、此處で今玉枝の眼先へ突き付けて、「さあ是を見よ」と膝詰に爲るやうな材料がある譯でないから、是には内心鬱からずトチ迷つたのであつた。

「玉枝は其處を附込むと云ふのでもないが益烈しく歎歎りの度を高めて、然も

身も世もあらぬやうに煩悶の態を見せつゝ、

「それまでに被仰る以上は、必定立派な證據がお有り遊ばすんで御座いませ

う。情願それをお見せ遊ばして下さい。」

と、セツ付く。

「證據……？證據は和女の良心に問ふて見るのが一番確かだ。

善七郎は最早振りかざした斧である。只無意義に引退る事は出来ぬのであつた。

「良心と申しても、私の良心には誓つて左様な曇りの影はないので御座います。

確かな證據を見せて頂きません中は、譬ひ私は大森の海へ身を投げて果ます

までも、郎君のお側を離れて實家へ歸る譯には参りません。」

玉枝の玉枝たる本音は、そろ／＼その萌芽を露はして來た。花嫁の優しさは初々しさとは、知らず識らずの間に自然ら彼女の身邊から遠退きかけて居た。

「そりや和女の隨意だがね。」

と、善七郎は故意に冷淡に答へて、

「飽まで乃公を盲者に爲て了はうと云ふ和女の精神を乃公は憎く思ふんだ。和女の今言つた事柄がすべて濡れ衣であるなら、和女はそれを立派に乾し上げて見せる責任があるんだからね。」

「くッ、口惜う御座います。私、必定此の濡れ衣を乾さすには置きません。けれども、郎君だつて、私に是丈の事を被仰るには、只他人の悪口や讒訴ばかりでなく、何か確かな證據が有りなんでせうから、それをお見せ下さらないと云ふ法はないでは御座いませんか。」

「證據はない。證據はなくとも、信するに足るべき理由が澤山にあるんだ。」

「宜しう御座います。私も決心が御座いますから……。」

と、玉枝はついと起ち上つて、帯のゆるみを締め直した。將に何處へか出て

行きさうな氣色であつた。

「どッ、何處へ行くのか和女。」

と、善七郎は稍肚膽を抜かれて訊ねた。

「何處でも宜しいでは御座いませんか。和女の隨意にせよと被仰るから、私、随意に致すのです。」

「随意に爲るのは關はんが、善七郎の名譽を毀損するやうな事爲れては困

よ。」

「存じません、私。」

と、玉枝は又泣崩れるやうに其處に坐つて、

「私、死んで了ふより外は御座いません。」

と、五體を顛はず。髪は散々に亂れて、眉根は恐ろしきまでに逆釣り、刺へ丹花を欺く唇は、死人の如く蒼白めきつて居た。

善七郎の酒は此時既に全然醒めはて、了つた。加之も、玉枝が「死ぬより外に仕方がない」と言つて、身悶えを爲ながら泣き倒れて居る風情を見て見ると萬更それが政略から出た一時遁れの方便的腹立や怨恨のみとは思へないので、——無論疑心の雲が晴れた譯ではないが——幾分燃え盛つて居た炎の力は鈍り氣味になつて來たのである。

「和女、本統に死ぬ丈の決心があるのか？」

と、皮肉らしい中にも、今までよりは餘程靜平な語調で念を押すやうに言つた。

「死にますとも、冤の罪を被せられて、誰がのめくと生きて居られるもんですか。私ッ、私ッ、私ッ、屹度死んでお目に掛けます。」

玉枝は自暴自棄半分泣きながら語を返した。そして再びむつくと起き上つて、齒を噛み縛りながら室の外へ駈け出さうと爲た。

「お待ちツて云ふのに、玉枝。」

と、善七郎は流石に自個の身分と名譽とが大切な事を知つて居るので、それを黙つて打捨つて置くほどの勇氣は持ち得ないのであつた。

「存じません、私。」

と、玉枝は權もほろゝであつた、良人の方を振向かうとも爲ないで、縁先の所まで五足六足よろゝと踏み出しかけたが、

「口惜いッ。」

と一語、劈くやうな叫びを發したかと思ふと、突然兩の手に虚空を掴んで、さりとと奥齒を噛み鳴した。

善七郎は妙な眞似を爲る女だと思ひながらも、一面には多少の氣遣はしさも

伴つて居たので、

「玉枝、止めは爲んが、まだ少し言ふ事があるから、此處へお坐り。」

口早に言つて、引き止めやうと爲ると——その刹那であつた。玉枝はぼつたり縁端の硝子戸に破るゝばかりの震動を與へて、仰向けに打倒れたのである。

「やッ、卒倒した容子だね。」

と、善七郎は我を忘れて駆け寄つて抑へた。顔の色はもう土の如く變じて、眼を空へ付けたなり、肩の邊で苦しうな呼吸を爲て居る。殆ど人事不省の體であつた。

「定や、岩雄、水だ。水を早く、奥さんが急病だよ。」

随意に死ねとは言つたものゝ、此の容態を見ては、何ぼ善七郎でも狼狽すには居られぬ。

定やと岩雄とは眼を圓くして飛び出して來た。水やら氣付薬やら、素人の能

ふ限りを應急的に手當して、善七郎の居間の真中へ蒲團を延べて安靜に横臥せしめた。一方には勿論電話をかけて醫士を呼び迎へたのであつた。

三十分間の後醫士は來た。その診定に依ると、一時的急性の子宮痙攣であつて、左程心配するには及ばぬとの事であつた。醫士は一回の注射を施し、室内の溫度と手當の方法とを細かに注意して立ち歸つた。

夫婦間の激越なる論戰に就ては、善七郎も素より口外する筈はないから、醫士は唯發病の原因を氣候の激變と運動の過度とに歸して居たらしいが、定やだけは少くともその邊の消息を曉り知つて居るのであつた。

四十二

「御承知の通り、私は一滴も頂かん方で……その代り徹頭徹尾箸の持ち詰めで御座います。いやもう此の上なしの下卑性に出來上つて居りますので、は、

は、は。」

「まあ、何も交際と云ふ事がありますよ。盃だけでも受けて呉れ給はんでは談話に曲がなくって不可さ。」

暮近き臺場の沖を前面に見晴らし、床の間を脊に上手へ座を占めて居るカラの高い洋服姿は藤本善七郎で、その傍らにきちんと行儀好く畏まつて居るのは例の久永宗吉であつた。久永の方は無論飲まぬ口であるが、善七郎はその分までも自分一人で引受けて居るので、只さへも淺黒い顔の色が赤銅色に變色しかけて居た。

「折角のお話ですから、ではお盃だけ頂戴致しますが……時に藤本さん、私に御用と被仰いまするは？」

「いや、その事なんですがね、久永君、それに付けてもまあ一杯飲んで貰はなぐちや困るんです。」

と、善七郎は無理に久永の盃へ酌爲ながら、

「又女中など出て来ると面倒だから概略のお話を爲ときますがね、實はね、久永君、君に一ツ折入つて御面倒を願はにやならん事が出来たんですよ。」

「私如き鈍物で出来ませう事なら、大恩のある貴方の御命令とある以上は……。」

「は、は、は、それを言はれると僕の方で大に困るですよ。僕は決して、僅かばかりのお世話を爲て差上げたからと云つて、それを枷に君を願使するなんて、そんな卑劣な根性は持たんのです。僕の知人中君以外に意中を打明けてお囃みする人がないので、實は態々こんな所まで御誘ひして来た譯なんです。がね、久永君、御迷惑でせうが、人助けだと思つて、一骨折つて見て下さい。」

「一骨はおろか、藤本さんの御利益になります事なら、水火の中も辭さん覺悟で居ります次第で……。」

「難有う。實はね、久永君、大丈夫が女の事位にと君は思はるゝかも知れんで

すが、僕の妻の身上に關した一件なんです。」

妻のと云ふ一言を聞いて、久永は忽ち胸に思ひ當つた。若しやしたら先達ての夜、妻のお綱が始めて善七郎の留守宅へ伺候して歸つて來てからの物語りと關聯する所がありはせぬかと、怖々ながら膝を進めた。

「奥様の御身上に關して、何か御異變でも御座いましたのですか？」

「異變と云ふほどでもありませんがね、玉枝は一昨日僕が名古屋から歸つて來た朝から病氣を惹起して褥に就いたまゝなんです。」

「へッ、奥様が御病氣？目と鼻の間に居りながら、少しも存せず居りましたので、ついお見舞にも……。」

「まゝ、久永君、待つて下さい、問題はその病氣のみでなく、彼の女には僕と結婚する以前、確かに一人の情夫があつて、然もそれとの仲に子供まで出來て居る事が概略分つて來たのです。乃で、當面の必要と云ふのは、君のお手

を煩はして、その子供なり、乃至はその情夫なれを生きた證據物として、姓名居所を突止めた上、未練なしに彼の女を親元へ突ツ返してやらうと思ふんですが、何とか名案はないものでせうかね。」

善七郎の論調は頗る明晰で、然も胸中の決心は殆ど動かす可らざるもの、如く見受けられた。

四十三

「それは實以て、意外千萬の事を承はりますが、然し、奥様に限つて左様な御不都合はなからうやうに存じますがね。」

久永は内心お綱の先見が適中したのにも一驚を喫したが、善七郎その人が今日までそれを知らずに居た迂濶さにも少々奇異の感じを抱かすには居られなかつた。それに宗吉の性質としては、お綱から彼の事を聞いて以來、機會さへあ

つたらば、善七郎に夫どなく忠告を試みて見やうと思ふ心は十分にあつたのであるが、善七郎の方から突然先を越されて了つたので、反つてそれを打消すやうな調子に變じたのである。

「いや、確かにあるんです。勿論僕と雖も具體的にその事を知つたのは極く最近の事なんですがね、最初から何うも何等かの秘密を有つたらしい女だとは感付いて居たんですよ。でね、久永君、他に何か彼の女の缺點を數へ擧げて離別して了ふ分には造作もないんですけれども、僕も一個の男ですからね。彼様女に只盲者同様……いや、眞の盲者以上に扱はれて居たかと思ふと、怎麼にも不愉快で堪らんですよから、十分の證據を突き付けて、懲らしめる丈懲らしめた上に立派に放逐してやらうと云ふ決心です。」

善七郎の意氣は一語毎に益昂ぶつて來るのであつた。そして半は夢中のやうに銚子を引寄せては、ぐいぐいと呷りつゞくるのであつた。

久永は親の意見でも聽く忤のやうに頭を低く垂れて、熟と深く考へ込んで居るのであつたが、十數秒の後初めて徐かに顔を擡げて、例の臉を三四回しよばつかせた。話の込み入つて來るに連れて、段々劇しく臉をしよばつかせるのが毎度ながら彼の特徴なのであつた。

「藤本さん、眞個具體的事實を御承知になつてお在のならば、私も實は一言申し上げたいと思つて居りました所です。」

「そりや、耳よりの話です。君から僕に言つて呉れらるゝ事實と云ふのは？」

と、善七郎は我を忘れて前へ乗り出す。

「別儀でも御座いませんが……。」

と、久永は妻のお綱から聞かされた通りの事柄を極めて率直に物語つて、

「……其處で御座いますから藤本さん、人生の事を疑ひ出せば際涯もないやうなものでは御座いますが、若し貴方のお口からは是等の事を言つてお聞かせに

なつて、眞實奥様が貴方の面前で懺悔遊ばしましたら、それで一切水に流しておやりになるのが、結局双方の幸福と云ふものでは御座いますまいかと、附加へた。

「成程、女の事は女の眼で観察しなけりや分らんものですな。最後の決定は暫時最後の懸案としましてです。玉枝の乳房の格恰とか乳首の黝み工合とか云ふ事には、僕も眞個注意が届かなかつたんです。それに君の許に居る彼の子供の容貌と玉枝の容貌とが何處かに似通つて居る點があると、君の細君が鑑定を付けられたなどは、實に非常な爛眼と言はにやならんです。成程、然う云ふ話を聞いてから憶ひ出すのも遅蒔の至りだが、久永君、彼の子供を産み落した女と云ふのも、何時だかの君の噂話では、陸軍軍人の娘だとかお言ひのやうでしたね。」

「甚だ不確では御座いますが、只陸軍の軍人の令嬢と云ふ事は私も妻も聞き

及んで居ります。」

「たしか然う云ふお話でしたね。」

と、善七郎は猪口を差置いて、屹と兩腕を組み合した。

四十四

「私も妻も豈夫とは存じて居りますけれども、世間には往々小説や芝居以上の奇遇とか因果話とか云ふものが御座いますからひよつとか爲たらば私の預り兒が奥様の秘し兒と言ふやうな譯では御座いませんでせうか。」

久永は半信半疑の逡巡がちな容子で漸くの事に言ひ出したのであつた。

「……何うも然うらしく感ぜられますね。」

と、善七郎は尙右つ左つの小首を捻つて、

「果して然うと云ふ見込が付いたらば、久永君、僕に一策あります。」

「一策と被仰いますと？」

「僕は此處一週間ばかり會社の用務に托して、宅へ歸らずに居りますから、その間留守取締りの了簡で、君の御夫婦に僕の宅で寢泊りして頂くんです。御迷惑でせうけれども？」

「いや、迷惑など云ふ事は毛頭御座いませんが、然う致して何う致すんで御座いませう。」

「そして思ふさま、玉枝の見て居る前で彼の子供を残酷に扱つて貰ふんです。そしたら豈夫にどんな意志の強い女でも、何とか本音を吐かすには居られないだらうぢやありませんか。」

「これはしたり、貴方のお語では御座いますが、罪科もない嬰兒に對して殊更残酷に扱ふと云ふのは、甚だ出来かねるやうに思ひますが……。」

と、久氷は自分の正直心から割出して、頗る當惑の眉を擧めた。

「いや、其處が芝居ですよ久永君、目的は玉枝の秘密を探り當さへすれば足るんですから、君と御細君とが協力して絶えず玉枝の言動に注意して下されば可いんです。」

「致しますと、宛然昔の隠し目付と云ふ役廻りなんで御座いますね。」

「平たく言へば然うです、僕をして男の面目を立てさせやうと思ふ親切心がお有りならば、是非とも一ツやつて見て頂きたいのです。」

「お請を致しますのは何ですが、全く柄にない重大任務で御座いますから兎も角家内にも一應相談致しました上で御返事を……。」

「そりや不可ですよ。」

と、善七郎は稍齒痒さうに頭を掉つて、

「君は唯ッた今水火の中でも辭せんと言はれたばかりぢやありませんか。では僕が斯ほど迄にお囑みするのを肯いちや下さるんですか？」

「いや、御立腹では困りますが、御覽の通り私ども夫婦は山出し同様の無意氣地者で御座いますから、折角お請を致しましても、旨く参りません時には反つて……。」

「そりや關はんです。そしたら又その時の手段を講ずるより外はないです。彼ア云ふ怪しからん女を嫁れて寄越した親も親なら、第一に先づ本人の圖々しさ加減が測り知られんですから、諄いやうですが久永君、僕は懲らしめる丈懲らしめ、充分に耻面を搔かせた上で、放逐してやる決心です。此事を知るまでは、眞個僕はお惚氣ではないですが、縹緞と云ひ態度と云ひ育ち柄と云ひ、十人並以上の妻を貰ひ當て、此の上もない幸福な家庭を作り得た事と喜び楽しんで居つたのですが、今と成ては全然それが反比例を示して來たんですから堪らんですよ。」

と、善七郎は心から無念氣に熱い息を吐き流した。

四十五

善七郎と久永とが、鮫洲の川崎屋で會合して、夕飯を認めながらに斯うした相談を取極めた恰度その夜の事であつた、左らぬだに精神の落着く暇のない玉枝は、病に託して二階の一室に閉籠つては居るやうなもの、ついそ一晚でも安らかな夢さへも結んだ事のないのに、今夜は亦、良人の善七郎が平生歸つて來るべき時間が過ぎてても一向に歸つて來ぬので、心中の煩悶は更にノノより以上であつた。

「私も最う此家に居るのは長い事ぢやあるまい。」

何れの道、今のやうな状態で押して行けば、遅かれ早かれ破鏡の嘆を見るのは知れきつた事であるが、然し、玉枝の一身上の都合から言ふと、自分自ら結婚前の罪惡を披瀝して、自分の方から責を引くと云ふのは、此の場合何うして

も出来得がたい事情があるのであつた。それは自分一人の不名誉とか不面目とか乃至は折角の思ひで取絶つた榮華の棧を失脚するとか云ふ事の外に、嚴格と云ふよりも寧ろ頑冥に近い古武士の如き父親と、今近衛の騎兵中尉として父親の許に同棲して居る兄の周義とに對して、すべて是までの自分の醜行が暴露されて了へば、縦ひ自分と母親とが如何程の辯疏……採消を試みた處で、到底平和に收まるべき氣遣ひがないのである。場合に依ては、母親と自分とを並べて置いて、二人一緒に刀の錆とも爲かねないのが、父周臣の氣質なのである。

だから、玉枝としては、今日が今日善七郎から離縁の宣告を言ひ渡されるまでも、それは過去に犯した罪惡の爲めではなくして、何等か他の世間に有りふれた家庭上の不折合とか若くは病氣とかの理由に歸して貰ひたいのが、切ても希望なのであつた。けれども、それを今自分の口から善七郎に懇へる譯にもゆかねば、懇へた所で肯いて呉れる筈は金輪際無いのである。要するに玉枝は

泣くにも泣かれぬ苦痛を受けつゝあるのであつた。

良人が名古屋から歸つて以來、今日で三日間の玉枝は、彼の時の伴りの卒倒を土臺にして、四六時中唯その事のみを考へに考へ込んで居るのであつたが、偕自分の過去の罪惡を消滅させやうと思へば、自分の命を無きものにするか、若し左もなければ、我を呪ふ浮世を此方から逆に呪ひ返して、昔の戀の白井逸郎と飽まで夫婦になつて、暮すかの此二ツより外にはないと思ひ定むるに至つた。

良人は未だ歸らず、四邊に幸ひ人氣もないので、玉枝はやをら袴の中を脱け出し、鏡臺の抽斗の底深くに秘め置いたる彼の逸郎からの手紙——白粉の女の持つて来た——手紙を取り出して見ると、剃刀はまだ彼の時のまゝにちやんと巻き込まれたなりであつた。

四十六

玉枝は今初めて此の手紙を見る譯ではないが、血と涙とで書き列ねたやうな痛烈な文意は、一句……一句毎に宛然逸郎の憤懣と怨恨とで燃え立つて居るやうな感じがせられて、繰返せば繰返すほど益々自分の身が恐ろしくなつて來るばかりであつた。是までも既に寸断々に引破つて火の中へでも捨て、了はうかと思つた事は一度や二度ではなかつたが何う云ふものかそれが妙に惜いやうな氣がして、断行するまでの勇氣がなかつた。そしてよく／＼今夜のやうな思ひ詰めた事情が胸の底にたゞまりたまつて來る時になると、知らず／＼抽斗の奥から取り出して見れば、繰返し讀むのが切ても彼女の心癒せなのであつた。

で、その文中、「……玉枝さん、君は戀の眞實を捨て、虚榮の雲に泛び、僕

は戀の眞實に捨てられて、悔恨と憤激の火中に身を焦されつゝあるのだ。だから君と僕との間には既に千里の懸隔が出來て了つた。けれども、二人の仲に出來た彼の子供の上には、僕と雖も尙充分に親としての權利を主張し得ると同時に僕と彼の子供の間には、未來永劫何の懸隔も差別もあるべき筈がないのである。幸ひ僕の方に適當な保育者が出來たから、茲一週間に彼の子供を僕の手許へ引渡して貰ひたいのである。それをしも君が拒むやうな事があれば、玉枝さん、氣の毒ながら僕も最後の處置を取らねばならぬから、豫め覺悟を爲て呉れ給へよ。」云々との所まで讀み至ると、玉枝は何時も定つたやうに脊髓から鉛の熱湯でも注ぎ込まれる様な苦痛であつた。

「あゝ、こんな所へお嫁に來るんではなかつた。」

今更ながら、何の爲に善七郎の許へ嫁入したのかさへ、自分が自分に分らなくなつて了ふのが常であつた。

「そして加之にこんな剃刀までも入れて寄越したんですもの。面當と云ふよりは私にこれで自殺せよと云ふ謎に違ひなからう。」

玉枝は剃刀を手に持て、情々とその冷たい鋭い光を眺め盡した。

「彼の時渡良瀬の堤で首尾好く白井さんと二人で死んで了へば、こんな苦痛も心配もなくつて済んだのにねえ。けれども、私はまだ死ぬ譯にゆかない。縦ひ死ぬにしても白井さんにモ一度遇つた上でなくては……？」

手紙を元の如く巻き收めやうと爲る時、誰やら階子段をみし〜と昇つて来る音がしたので、玉枝は大急ぎに蒲團の下へ手紙を押し隠して了つた。

「奥様、お気分は如何で被在います。あの久永さんの御夫婦が坊ちやんを連れてお越して御座いますが。」

と、定やの注進。

四十七

「然う……大變に遅く入しつたんだわね。」

と、玉枝は太儀さうな眼で定やの顔を見ながら、

「そして旦那様はまだお歸り遊ばさないの？」

「奥様、その事なんで御座いますが、あの旦那様は何か會社の方で急の御用がお出来になつて、今晚からあの一週間ばかりはお歸りにならないんださうで御座います。」

「えッ、今晚から一週間ばかり？」

玉枝は胸に手を當て、熟と考へ込んで了つた。

「それが爲めに久永さんの御夫婦がその事をお知らせ旁奥様が御病氣で被在る事ゆる、お留守中に萬一やの事でもあると不可ないからと云つて、御夫婦

共にお自分のお宅を戸締りして泊りに来て下すッたんださうで御座います。何と云ふ御親切な方達で御座いませうね。」

『では、あの定や、御夫婦で子供を連れて、態々泊りに来て下すッたとお言ひの？』

『はい、此の節は大變世間が物騒でもあるしするから、別段旦那様からお囑まされた譯ぢやないけれども、強て然うさして頂きたいと斯う被在るんです。』
『餘り話が突然だから、私、變手古で仕方がないけれども、折角然う被仰つて下さるなら、泊つて頂くも可いでせう。』

玉枝は場合が場合だけに、一層怪訝の念に堪へぬのであつたが、結局良人の留守の方が自分の最後の處置を決するにも、幾分都合が好かりさうな氣が爲るし、それに、表面素知らぬ顔は爲て居るやうなもの、血を分けた我子の逸郎——不思議と名前までが昔の戀人と同じに命けられて居る逸郎が、久永の夫婦

と一緒に此家で一週間の寝泊りを爲ると云ふのは、彼女に取つて是ほど嬉しい是ほど楽しい機會は決してないのであつた。玉枝はそれと同時に一刻も早く我が子の顔が見たくて堪まらぬのであつた。

機敏なる定やは、一目にそれと察したらしく、

『奥様、それではあの、お好きな坊ちゃんを此處へ連れて参りませうか。』

『然うねえ、然うでも爲たらば少し病氣もまされるかも知れないけれども、御夫婦にもお目に懸らない前に、逸ちやんだけお借するの何だから、まあ後にして下さい。兎に角和女は階下へ行つてお茶でも差上げる仕度を爲として頂戴ね。』

『ほんに左様致しませう。』

と、定やは座を起つて、玉枝の病室を立ち出でやうと爲ると、その途端、久永の妻のお綱が階子段の中途まで昇つて來ながら、

「お定さん、お玄關に誰方かお人のやうで御座いますから、早く来て下さいまし。」

と、慌だしさうに知らせた。

四十八

「おや、左様で御座いますか。では屹度旦那様が會社からお着換へでも取りにお遣はしになつたのかも知れませんか。」

と、定やは眞實然う思ひ做して、大急ぎに玄關先へ駆出して見ると、ついぞ此の邊で見掛けた事もない五十恰好の職人體で、何處やらに一癖あるらしい男がヌツとして居る。

「へ、へ、へ、夜中に飛んだお邪魔を致しますが、俺や京橋の新富町から参りましたんです。御當家の奥様にお目に蒐られますれば此の上もない幸福です。」

が、それが叶ひませんやうなら、先日のお返事を是非共頂きに出ましたと……へえ俺やなにお使ひに囑まれた丈で御座いますけれども、然うお取次さへ爲て下さればちやんとお分りになるんださうでへえ。」

と、可笑くもないのになく。

「あの京橋の新富町からお入來になりましたんですか。」

新富町からと云へば、先達ての日暮方に來た白粉の女に囑まれて來たものは立ろに定やの胸に合點出來たが、豈夫に自分の一存で勝手に追拂つて了ふ譯にもならない。

「御病氣で御静養中では御座いますが、兎も角もお取次丈致して見ませう。」

と、言つて、定やは一先づ玉枝の室へ取つて返した。

「あの奥様、旦那様からのお使ひかど存じましたら、飛んだ方角違ひなんで、私、どんなに恟驚致しましたらう。」

と、息をも継がずに使ひの者の口上を傳達に及んだ。

と、玉枝も勿論悸乎とせずには居られなかつたが、然し、先達て白粉の女が始めて面會を求めに來た時ほどではなかつた。其には自分自身の方にも、内々にはもう何とか言つて來る時分であると云ふ豫備的想像が付いて居たのと、第二には事と品に依つては、此方から進んでも白井に遇つて見たいと云ふ心持さへ抱いて居たのであるから、或る意味に於ては寧ろそれを待ち設けて居た位なものであつた。

「然うかえ。方角違ひだつて、別に驚く事はありやしません。どうせ一度は何とか言つて來る筈になつて居たんだから……。」

『でも奥様、いやな薄氣味のわるい人なんで御座いますもの……。』

『定やにも似合はない……。』

と、玉枝は暫時頰杖を支いて、思案の願を襟に埋むるのであつたが、やがて

決然として思ひ定めたる事のあるらしい氣色で、

「關ひやしない事よ定や、今晚は病氣の爲に失禮致しますが明日か遅くも明後日の晩までには必ず此方から確かなお返事を申上げますと、斯う言つてやつて下さい。」

「畏まりました御座います。明日か明後日の晩までに此方から……と申すんで御座いますね。」

「然うです。お使ひの人が變に疑ひなど起さないやうに判然と然う言つて頂戴よ。」

その判然とした語調から察しただけでも、玉枝の胸中には此の時既に何等かの決心が定められて居たものと思へた。

四十九

定やの所謂薄氣味のわるい使ひの男は、案外柔順しく納得して立ち歸つたのであつた。暫時の後定やがその事を復命に來た時には、玉枝は只黙アつて蒲團の上に突臍して居たゞけであつたが、重さうな唇を僅かに開いて、

「定や、久永さんの御夫婦にお目に蒐らなくては悪いんだけれども、私、頭が重くて仕方がないから能くお詫を爲といて下さいよ。」

「宜う御座いますとも、私もう奥様の仰せがなくとも、ちやんと然う申しときまして御座います。」

「然う、それは難有う。」

と、玉枝は斯う言つたなりで、元氣なく枕に頭を宛行つて了つた。

定やが手持無沙汰に引退つた後は云ふまでもなく、玉枝は又一人ぼつちの離れ小島に取殘された寂寞さに復つたのである。然し、其寂寞さは必ずしも閑靜とか無聊とか云ふ寂寞さとは異つて、苦痛と懊惱と悲哀とに取卷かれたる寂寞

さであるから、容易に夢など結び得らるべき筈がなかつた。その癖自分にはもうちやんとした或る決心を定めて居るのであるが、その決心を斷行するに就いても又一方ならぬ困難と危険とが附纏つて居るのであつた。

彼あも爲たらば……憊うも爲たらば……と、思ひに惱み、惱みに思ひを勞しつゝある間に夜は段々と更け行くのみであつた。鏡臺の側に活けてある早咲の櫻が風もないのにひらひらと散行くを見てさへ、玉枝は自分の明日の命かと思ひなされて、心細さは一通りでなかつた。

「……成程、私かわるかつた。阿母さまが何と被仰らうが、誰が何と言はうが子迄なした白井さんを捨て、此家へお嫁に來たのが、第一の過りであつたし、又此家へお嫁入するに爲ても、一生涯連れ添ふべき良人に、過去の一切を包みかくして、心にもない處女の姿に化け粧つて居ると云ふのは、恐らく女としての罪惡中に是ほど重い罪惡はあるまい。それなればこそ此の大奇責

を受けねばならぬ、身とはなり果てたのである。わるかつた。私かわるかつた。私が真にわるかつたには違ひないが……然し、世界中の女に……世界中の娘に、私と同じやうな罪惡を犯して居る者は唯の一人もないであらうか？ 良人と云ふ者が定まつてからの不義密通ならこれは勿論一も二もない話だけれども結婚前の戀人……處女の時代に我が思ひ込んだ戀の對手があつたからと云つて、それが直に罪惡と云ふ名を付け得られる筈のものであらうか？ 假りに若し罪惡と云ふ名が付け得らるゝにしても、それ丈の爲めに良人に對して二ツなき命を捨て、まで身の辯疏を立てねばならぬほどの義務があるだらうか？ 女と云ふものは一體それほどに弱いものであらうか？ 私には何うしても然うは思へぬ。何うしても合點が出来ない。自分勝手と言ふ人は罵れ、私はもう斯うなつた以上、親も兄弟も現在の良人も一切残らず振り千切つて、彼の白井さんと戀の初一念を通して見せる。私は然うする。然うするより外

に私の活路はないのだ。そして出来る事なら、不思議の因果で邂逅合はした彼の子も共に連れて行きたい……。」
口にくそ言はぬが、玉枝が最後の決心と云ふのは正しく此の通りなのであつた。

五十

翌る日は来た。久永は會社へ出勤の刻限が近づいて来たので、お綱と子供とを藤本の家に残して出て了つた。玉枝は必ずしも久永の出て了ふのを待ちかまへて居たわけでもなかつたが、お綱の方が女同士の心安立て、もあり、先達つての晩既に着古しのコートや大島の袷など與へた縁故もあるので、遅々ながら病褥から離れて、階下の座敷へ姿を現はしたのであつた。髪は平生の艶々しい丸鬘を取崩して、無造作な束髪にして居た。顔の色も心持蒼白い上に睡眠

不足の結果は眼の球までが妙に湿みを含んでどんよりとして居た。

「まあ奥様、如何で被在います。つい御病氣の事も存じないで居りましたが、昨晚始めて良人から伺ひましたので。」

と、お綱は何處までも世話女房の如才ない應對態で言つた。

「御親切に難有う御座います。態々御夫婦で留守番に来て下さるなんて、本統に恐れ入りましたわね。」

と、玉枝は一通りの挨拶を返しながら、お綱の膝に抱かれて居る逸郎の顔に瞳を轉じて、

「大層今朝は柔順です事ね。」

と、愛憎好く言ふと、逸郎は早や飛び上るやうに脊延びを爲ながら、玉枝の方へ捻ぢ向いたのであつた。

『ほ、ほ、ほ、好い子〜。さあ久々で小母ちゃんのお膝へ來るの。』

所謂、母子の眞情は争はれぬもので、玉枝が斯う言つて、膝を突進めると同時に、逸郎は紅葉のやうな兩手を差延べて無理にも玉枝の膝へ這ひ縋らうとした。

此の時は流石に玉枝も、黓んだ乳首を逸郎の口へ啣ませる事迄は爲なかつたが、可愛いくて〜堪らぬやうに頬摺しながら、

『何うしてまアこんなにいぢらしいんでせうね。』

と、獨語のやうに呟いて居た。

隠し目付のお綱は、終始見ぬやうな態を爲ながら玉枝の一舉一動に眼を配つて居るのであつたが、心ではもう疑を挿むべき餘地さへもないと思つた。

「奥様のやうなお若いお美しいお方が、そんなにして子供など抱いてらつしやいますと、何だか不調和で御座いますわね。」

「あら、思ひがけもない、私、若いどころぢやありません、これでも随分齡を

拾つてますのよ。」

ほ、ほ、ほ、然う被仰つても貴女、私なんかとは比べ物にはなりや致しませ
ん。それに私なんかは一度もう子供を産みましたもんですから、その時以來
と云ふものは全然一足飛びにお婆さんの仲間入を爲て了ひましたの。髪は薄
くなる、額に小皺は寄る……ほ、ほ、ほ、そればかりなら未だしもで御座い
ますが、身體の膚は汚くなる……乳首がだいなしに……。」
と、言ひさしてお綱は偷むやうに玉枝の顔色を視上げた。

五十一

玉枝はお綱が乳房の事を言ひ始めて、俄かに口籠りかけたのを見て、何とな
く自分の事を當て付けられたやうに感じた。けれども素知らぬ體に淋しい笑顔
を作つた。

『そんなものでせうかね。一度でも子供を産むと、それほごに齡を取るもので
せうか。』

『それは、酷いもので御座いますよ奥様、尤もその人の質にも據るで御座い
ませうけれども……。』

『そりや然うでせうともね。』

と、玉枝は斯う云ふ中さへも逸郎の顔を一生懸命に眺めて、何か腹の中で繼
續なしに工夫を回らして居る氣色であつた。

お綱の方でも油断なく、玉枝の身邊に注意の眼を怠らなかつたが、此の日は
遂に是ぞと思ふほどの事柄もなくして過ぎて了つた。

夕景に及ぶと、久永は會社の用を果て、こつくと正直に歸つて來た。そし
て是非共奥様にお目に蒐つて置く必要があるからと言つて、その趣を妻のお綱
に取次がせた。

すると、玉枝自身の方でも久永に會つて見たいと思つて居た處なので、早速二階まで久永に来て貰つて、昨夜からの夫婦が親切心に對して、細々の禮を述べた。

正直一點張の久永は、穴にも入りたいほどの思ひであつたが、豈夫に「藤本さんから秘密の依頼を受けて隠し目付に来て居るのです。」とは言へない。玉枝が其處へ氣付かずに禮を述べて居るのが、寧ろ氣の毒で氣の毒で堪らぬのであつた。忽ちにして例の臉をしよぼつかせ始めた。

「奥様、わるく思つて下すつては困りますが、萬々一にも貴女の御心中で、御主人に秘密になすつてお在遊ばすやうな事が御座いましたら、只今の内に思ひ切つて、打明けてお了ひになつた方が宜いでは御座いませんか。」

と、久永の久永式な所は即ち此處なので、彼は眞個双方の利益と幸福を圖る了簡で短刀直入に切り出したのであつた。

「ほ、ほ、ほ、久永さん、突然に妙な事を被仰いますわね。私、何にも良人に包み隠しゝて居る事など毛筋ほども御座いませんわ。」

玉枝はつんどして言ひ放つて、澄し込んで了つた。然し、此の時始めて夫婦の者が隠し目付に入り込んで来たものであることを確實に悟つた。同時に良人の善七郎が會社の用務に託して、歸宅しない理由も明かに解し得たのであつた。玉枝は愈身上の大事が迫つて来たなど思つた。

「いや、私も無論然うとは存じますが、それでも人の身上と云ふものは萬々一と云ふ事が御座いますもんですから……。」

と、久永は恐縮極まつた體で頭を掻いた。

「久永さん、大抵に遊ばして下さい。」

と、玉枝は一倍拵高な調子で、

「女の秘密と云へば、何れ良人の眼を掠めて俳優買でも爲るとか、乃至は他に

情夫があるとか云ふ事よりないんでせうが、失禮ながら私はまだ此の藤本家へ来てから、自分一人で御門外へも踏み出した事はないんで御座います。秘密などのあらゆる筈はないでは御座いませんか。」
と、眞白な額に時ならぬ電光！

五十二

久永は骨灰微塵であつた。自分の正直心の言はするがまゝに、つい無遠慮な口切を爲て了つたので、今更後悔の臍を噬んだが、もう奈何とも爲やうがなかつた。

「奥様、御勘辨遊ばして下さい。つい物の言ひ方も存じないものですから、腹で思つた事を迂濶りと申上げて了ひましたので……お氣に觸りました段は平にお詫を申上げますで御座います。」

と、疊に手を支いて詫び入るの外はなかつた。

「いえ、そのお詫には及びませんわ……。」

と、玉枝は不満さうな澁りがちな低聲で、

「それもこれも、元を正せば私が至らない點が多いからでせう。關ひません事よ。どうせ、世の中の人と云ふものはお互ひに猜疑の眼で睨み合つて居るのが普通だと言ひますからね。」

「奥様、一言も御座いません。眞個私が出過ぎた事を申上げたので御座います。然しながら奥様、比較的お馴染の浅い貴女様に對して、私が斯様な事を申し上げましたのは、全然私一人の罪と申す譯では御座いません。……只今はちと申上げかねますが、何れは奥様のお胸に御合點の參る時節が到來致しますから、それまでの處を情願御辛抱遊ばして下さい。」

「分りましたよ久永さん、貴方が辯疏なさるまでもなく、私にはもうちやんと

何も彼も好く分つてゐるんですから、打捨つといつて下さいまし。どうせ私は四方八方に敵を引受けて居る身體なんですから。」

と、玉枝は小蒼蠅いと言はぬばかりの顔付をして、ふいと自分の方から先へ火鉢の傍を離れて了つた。

久永は面色土の如く變つて、這々の體に階下へ降りたが、何分胸の動悸が収まらないので、妻のお綱に此事を打明ると、お綱は忽ち烈火の如くなつて、宗吉の非常識なる遣り口を罵り散らした揚句、「私が成代つて奥様にお詫して來ませう」と云ふ事に夫婦評定が決つた。で、お綱は逸郎を抱へながら恐るゝ玉枝の居間へ昇つて來て見ると大に驚いた。既に日は暮れかゝつて、底冷のする陰氣臭い氣候であるにも拘はらず、兎も角も病人であるべき筈の玉枝が、鏡臺に向つて髪を立派にすき上げ、薄化粧を施した上に、他所行の着物や帯さへちやんと取揃へて、將に是から何處かへ立ち出でやうとする仕度最中なのであつた。

つた。

「あら、奥様、お寒いのは何方へかお出まして御座いますんですか？」

と、お綱は餘りの意外にとぎまぎと爲ながら訊ねた。

「えッ、一寸急用があつて、東京まで行つて來ますから、お夫婦で能くお留守居をお囑み致しますよ。」

と、玉枝は勿論故意でもあらうが、憎いほど平然として、指の先の口紅をさして居た。

五十三

「お喜多さん、愈本人が出掛けて來たらしいよ。昨日の晩和女の叔父さんにわざわざ大森まで行つて貰つた甲斐は空しからずだ。」

白井は今、使ひの若い衆から受取つたばかりの手紙を半分どころまで讀みか

けながら叫んだのであつた。

「まあ、玉枝さんが御自身で……それが本統なら、よく／＼切迫詰つたからの事ことでせう。そして玉枝さんは今何處いまだこに来て被在いらいるの？」

と、お喜多はより以上意外いじやういぐわいらしい眼めを睜ひらつて、男おとこの顔かほを熟じゆつと視み上げた。

「つい築地二丁目つきぢちやうめの松月しょうげつとか云ふ料理屋れうりやに居かるらしい。僕ぼくは何なんにしても久ひさし振びでどんな面おもてを爲して居かやがるか見て來きてやらうと思おもふよ。和女おまへ淋さびしくども些ちつとの間まだから、待まつて居かてお呉くれ。」

「そりや待まつて居かると被仰おつしやらなくなつて、私わたし豈夫しまさつ附ついてく譯わけにやゆきや爲ませんけれど……。」

と、お喜多は遽たはかに不安ふあんらしい眼付めつきで、魅みするやうに白井しらみの横顔よこがほを覗のぞき込こんだが、

「……附ついてく譯わけにやゆきや爲ませんけども、白井しらみさん、私わたし、何なんとなく貴郎あなた

一人ひとりでは遣やりたくないのよ。」

「大丈夫だいじやうぶだよ、和女おまへに爲したらば、俗ぞくに云ふ焼木杭やけぶくひの危き険けんでもあるかと思おもつて、そんな事こと言いふんだらうが、先方ひかただつて今日こんにちでは和女おまへ、堂々だうだうたる藤本何某ふぢもとなにがしと云ふ良人ちやうとのある身み體たいぢやないか、下手へたをまごつけば、法律上はふりつじやうの罪人ざいじんとならなきやならないさ。」

「然さう云いへば然さうに違ちがひありませんけれども、男おとこと云いふものは然さう云いふ事ことにかけると、随分脆ずいぶんもろいものですからね。」

「莫迦はかを言いつちや困まるね。僕ぼくだつて多少廉恥せうれんちと云いふ事ことも知しつてりや、意氣地いきぢと云いふ事ことも心得こころえて居かるんだ。仇打かたきうちに出いかけて行いつて、反對あいていに先方ひかたの懐柔手段くわいじゆ手段に載のせ込まれて了しまふやうなごぢは爲しないから、心配しんぱいせずと、其處そこの羽織はなむぎを被きせてお呉くれと云いふに。」

「實際じつさい、貴郎あなたがその通すほりの覺悟かくごなら、私わたし安心あんしんして出だして進あげますけれども……

その代りね、白井さん、歸りの時間をちやんと極めて行つて頂戴！」

お喜多は單に女の爲なる嫉妬とか猜疑とか云ふばかりでなく、心から白井を昔の戀人に會はせにやるのは、爆裂彈の傍へ火を持つて行くやうな危険と災禍とが氣遣はれて仕様模様もないのであつた。

「時間を極めろ？えらい事になるもんだね。それちやね、長く見積つて一時間半と爲とかう。」

「好う御座います。」

と、お喜多は一寸柱時計を眺めて、

「今が恰度七時二十分ですから、一時間半と云へば八時五十分ですよ。十分位お負けを爲て進げてても九時迄には屹度歸つてらしやらないと、私、お迎ひに出かけます事よ。」

「可いとも……大丈夫と言つたら大丈夫だから安心しといで。」

白井は自分から帽子と外套とを掻ッ浚ふやうに引抱へて、急ぎ足に格子の外へ出て了つた。

五十四

「お連れさま。」

と、云ふ鼻かな女中の聲と共に、白井は松月の茶室めいた離亭の一室へ案内せられたが、がらり入口の襖を開けて内を覗くと、眩いほど明るい電燈の真下に玉枝は桐胴火鉢の縁へ手をかざして、物思はしさうに低垂れて居る姿が眼に映つた。

「玉枝さん、お使ひに依つて來ました。」

と、白井は稍右の肩を聳やかしながら、傲慢らしい態度で坐つた。

「まあ、早速に能くお越し下さいましたね。」